C O N T E N T S

1 私を育てたあの時代、あの出会い

中学2年生の時の出会いが教師生活の原点となった
北海道札幌市立山鼻中学校校長◎町田啓道（ひろみち）

特集

3 「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

4 対談

学級づくりと学習習慣の定着で中学校生活を軌道に乗せる
聖徳大児童学部◎壷内 明教授
東京都千代田区立神田一橋中学校◎岡田行雄校長

10 学校事例1

自主学習の指針を明確にして4月から学びのペースをつかむ
山形県東根市立神町（じんまち）中学校

17 学校事例2

縦と横の人間関係を築き新入生の意欲と思いを支える
静岡県沼津市立原中学校

24 資料

戸惑い悩む中学1年生——調査データから見た実態

28 特別企画 デジタル教材最前線［後編］

10年先のデジタル社会を見据えて試行錯誤を繰り返す

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

VIEW21
［びゅーにじゅういち］
2011
Vol.4
中学版

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第8回

中学2年生の時の出会いが教師生活の原点となった

北海道 札幌市立山鼻中学校校長 町田啓道 MACHIDA HIROMICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、町田校長が語る。

まちだ・ひろみち　専門教科は国語科。札幌市立丘珠中学校校長などを経て、2009年札幌市立山鼻中学校に校長として赴任。2011年度は北海道中学校長会会長を務める。

- 1965（昭和40）
  北見市立光西中学校
  2年生の時、担任だった村上隆先生に憧れ、「将来は学校の先生になろう」と思う

中学時代、ノートの隅に、「教師になりたい」という思いと、そのための高校、大学の目標をつづった

- 1978（昭和53）
  札幌市立北栄中学校に赴任
- 2003（平成15）
  札幌市立丘珠中学校に校長として赴任
- 2006（平成18）
  札幌市立元町中学校に赴任
- 2009（平成21）
  札幌市立山鼻中学校に赴任

指導方針に迷った時こそ原点に戻ることが大事

今の若い先生方は、昔と比べるとどのような指導方針で生徒と向き合うべきか、迷う場面が増えていると思います。背景にあるのは、学校教育への期待や要望の多様化です。

私が教師になったばかりの頃、多くの保護者は自分の子どもに対して「元気で楽しく学校に通ってくれたらそれで十分」と考えていました。子ども自身も、友だちと一緒に楽しく勉強や課外活動が出来ることを、学校に通う一番の目的にしていました。学校や教師に求められるものはとてもシンプルでした。

それが今は、「進学希望の実現」「部活動の充実」「生活指導の徹底」など、学校に対して求めることが保護者によって違います。更に、子どもは子どもで、保護者とは別の期待を抱いています。教師が「こういう信念を持って学級運営をすれば、生徒も保護者も自分を信頼して付いてきてくれる」という確固たる自信を持ちにくい時代になっていると思うのです。事実、若い先生方を見ていると、迷いを抱えながら生徒と向き合っている様子がしばしば見受けら

れます。

そんな若い先生方に私が伝えたいのは、「迷った時には、自分が教職に就こうと思った原点に戻るとよい」ということです。

生徒の目線に立って私たちに接してくれた

私が教師になろうと思った原点は中学校2年生の時、担任だった村上隆先生との出会いにあります。当時村上先生は新卒2年目。私たち生徒は、少し年上のお兄さんが出来たような気分で、休日になると先生の下宿先に遊びに行ったものです。

でも、先生は単なる「楽しいお兄さん」ではありませんでした。一緒に遊ぶ一方で、私たちが善悪の判断を誤った時には厳しく叱る面もありました。生徒の目線に下りて来て私たちと接してくれる存在であったのと同時に、教師としての思いから生徒を導いていく存在でもあったのです。両方の視点を場面に応じて見事に使い分け、生徒を引き付け伸ばす――それが、私が村上先生に憧れ、自分も教師になろうと思った理由の1つなのだと思います。

今でも印象に残っている出来事があります。足に軽度の障がいがある生徒がクラスにいました。体育大会のある種目にその生徒が出場するかどうかを巡り、クラスは悩みました。「Aさんが出場すれば、チームは確実に負ける。それは嫌だ。でも、Aさんを置き去りにして勝ったところで、その勝利に意味があるのだろうか」という両極の思いの間で、私たちの心は揺れたのです。

先生は自分の意見を押し付けずに「どうすればよいか、みんなで一緒に考えてみよう」と言いました。私たちは「先生は僕らの考えを尊重してくれている」と感じました。

けれども、今思うと、先生は教師としての目線から「生徒たちはAさんをきっと見捨てたりしない」と見通しを立てた上で、今度は生徒の目線に立って私たちの迷いを理解し、「みんなで一緒に考えてみよう」と発言したのだと思います。そして、直面した問題を自分たちの力で解決させることによって、一人ひとりの成長を促そうとしたのでしょう。

私も教師生活の中で、生徒と同じ目の高さで、彼らと接することを心掛けてきました。よく一緒に遊んだりしましたし、教師ではなく1人の人間として、自分の過去の挫折経験を生徒に語って聞かせたりもしました。生徒はそういう話を聞く時、授業中とはまるで違う表情を見せるものです。

その一方で、私は教師としての思いを持つことも忘れないようにしてきました。場面に応じて自分の立ち位置を変えることによって、さまざまな角度から生徒に働き掛けようとしたのです。こうした私の姿勢は、やはり私の原点である村上先生の影響を受けていると思います。

教師を続けていると、迷うことの連続です。そうした時こそ「自分が教師を志した時、どんな教師になりたいと思ったのか」という原点に立ち返ることが大事だと思います。そうすることで、心の霧がすっと晴れて基本姿勢が定まるのです。私はこの3月に定年を迎えますが、「原点を忘れないことの大切さ」を時間の許す限り若い先生方に伝えていこうと思います。

「迷った時こそ教師を目指した原点に立ち戻る」

特集

「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

中学生にふさわしい学習習慣や生活習慣を身に付けるために、導入期の指導は重要だ。しかし、先生方からは「なかなか効果的な指導が出来ていない」という声も聞かれる。今号では、中学校の導入期指導の課題や重要性を改めて見直すと共に、具体的な実践の工夫を紹介する。

導入期指導の課題とポイント

対談 ▶ P.4～9

導入期指導の課題と
重要性を整理。
課題解決のために必要な視点として
学級づくりと
学習習慣の定着を提案

導入期指導の具体的な実践とその工夫

学校事例❶
山形県東根市立神町（じんまち）中学校 ▶ P.10～16
学習シラバスや自学ノートの活用を通して
学習習慣の定着を図る

学校事例❷
静岡県沼津市立原中学校 ▶ P.17～23
ファミリー学級とグループエンカウンターにより
人間関係づくりを促す

対談

学級づくりと学習習慣の定着で中学校生活を軌道に乗せる

中学校入学直後は、小学校時代とは異なる新たな人間関係や学習内容、生活リズムなどに戸惑う場面は少なくない。戸惑いを解消し、有意義な3年間を送るための土台をつくるにはどのようにすればよいのか。入学直後から夏までの導入期指導の工夫について、中学校校長経験のある聖徳大の壷内明教授と千代田区立神田一橋中学校の岡田行雄校長が意見を交わした。

導入期の課題

生徒の不安と緊張をいかに取り除くか

最も気を付けるべき時期は5月の連休明け

――小学校から中学校に進学してきた生徒は、どのような課題に直面するのでしょうか。

壷内　新入生は、「中学校に入ったら勉強を頑張ろう」「部活動では何をしよう」と希望に満ちつつも、知らない友だちや先生に囲まれて緊張感のある日々を過ごします。未知の中学校生活に対する期待や不安が入り混じる中で、多くの生徒に共通する課題は7つほどにまとめられます（図1）。学校は、生徒の思いや願いを大切にしつつ、中学校生活に早くなじめるよう、これらの課題に取り組むことが大切だと思います。

岡田　現任校では約20～30の小学校から子どもが集まります。ほとんど知り合いのいない中で新しい人間関係を築かなければなりませんから、生徒の不安は大きいことでしょう。学習面でも、学習内容が難しくなり、教科担任制になることで、生徒は不安を抱えています。それをいかに解消するかが、1年生の担

図1　導入期の課題

1. 複数の小学校から集まってくる生徒たちが、良い人間関係を築けるか
2. 学級担任制から教科担任制に変わり、教科ごとに変わる教師との人間関係を築けるか
3. 学習に遅れが出ないように、自ら進んで学習が出来るか
4. 教師がいなくても、委員会活動や係活動に責任を持って取り組めるか
5. 校則を守り、中学校生活にスムーズに移行できるか
6. 部活動で上級生との人間関係を築けるか
7. 規則正しい生活習慣を確立できるか

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

聖徳大児童学部
壷内 明 教授

つぼうち・あきら◎教職歴38年。東京都公立中学校教諭、足立区教育委員会指導主事・指導室長、江東区立深川第三中学校校長、港区立御成門中学校校長、全日本中学校長会会長、中教審臨時委員などを経て、現職。

東京都千代田区立神田一橋中学校
岡田行雄 校長

おかだ・ゆきお◎教職歴34年。専門教科は理科。東京都公立中学校教諭、世田谷区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部中学校教育指導課指導主事、足立区教育委員会教育指導室長などを経て、現職。
千代田区立神田一橋中学校◎「向学、礼節、貢献」を学校目標に掲げる。礼節を重視した教育活動を推進し、「人間力」の育成を図る。生徒数は318人。

任の大きな役割です。

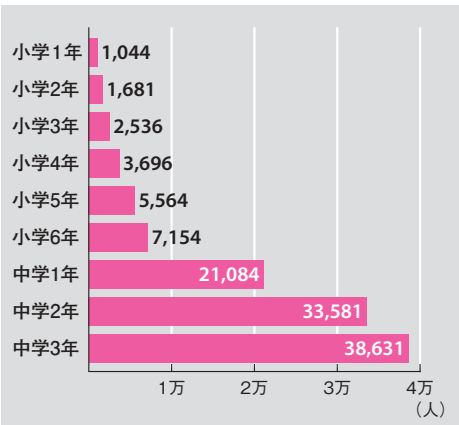
壷内 発達段階を考えると、1年生は自我に目覚め、独立の欲求が高まる時期です。更に、自己内省をするようになります。自分が気にしていることを他人から指摘されると、動揺し、自信を失い、自己嫌悪に陥ります。また、小学校のクラブ活動と違い、競技性の高くなる部活動では先輩・後輩という新たな人間関係に直面します。学習面の小中の違いもさることながら、人間関係の不安やプレッシャーが、登校しぶりや不登校、更には暴力行為となって表れることが考えられます。

岡田 どの学校も、新入生の不安を払拭するために、学習や部活動について説明するガイダンスなどを行っています。4月は緊張感もあり特に問題はないのですが、最も気を付けるべきなのは5月の連休明けです。4月の疲れが一気に出て、内心、学校に行きたくないと思っていた生徒が次第に登校しなくなることがあります。私の学校では、連休明けに休んだ生徒については必ず家庭訪問をするなど、早めに手を打つようにしています。

壷内 データで見ても、不登校数は中学1年生で増えています（**図2**）。こうした生徒の状況を認識し、教師が一丸となって生徒と向き合う必要があるでしょう。

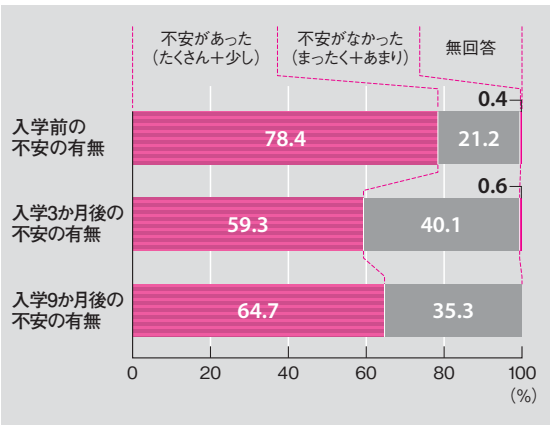
岡田 導入期の課題と共に、私が気になっているのは、2学期になると学校への不安が大きくなっていることです。東京都が実施した「平成22年度 小1問題・中1ギャップの実態調査」によると、入学前に不安がある生徒は78・4％であり、入学3か月後には59・3％に減少します（**図3**）。これは中学校生活に慣れてきたからだと思いますが、9か月

図2 学年別不登校児童生徒数



出典／文部科学省「平成22年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
＊今回公表する平成22年度調査結果には、東日本大震災の影響により実施が困難であった岩手県、宮城県、福島県は含んでいない

図3 中学校第1学年の生徒の適応状況



出典／東京都教育委員会「平成22年度 小1問題・中1ギャップの実態調査」
調査対象は都内の公立中学校の第1学年生徒 7月調査：7,593人、1月調査：7,392人

後の2学期になると64・7％に増加するのです。互いを理解するようになったからこそ新たな問題が生じ、学校生活に不安を感じるのでしょう。

「中1ギャップ」を考えた時、「学校種の壁」と、生徒一人ひとりの持つ「人間としての壁」の2つがあり、それらを乗り越えられる子どもと乗り越えられない子どもがいます。担任として、学級全体への対応だけでなく、個々の生徒も支援していくことが重要なのです。

導入期指導のポイント① 学級づくり

生徒それぞれの居場所がある学級に

3年間を有意義に過ごせるかは1年生の学級づくりが鍵

――導入期の課題を解消するために必要なことはどのようなことでしょうか。

壷内　先ほど挙げた7つの課題の中で、最も大切なのは、生徒同士の良い関係をつくること、生徒一人ひとりが「自分の居場所がある」と感じられるようになることです。そのためには、1日の大半を過ごす学級がそのような場になる「学級づくり」が重要になります（**図4**）。中学校にいることが楽しい、安心できる場所があると思えれば、学習や部活動などにも一生懸命になれるでしょう。生徒が中学校3年間を楽しく、有意義に過ごせるかどうか。更には、将来の夢や希望に向かって進めるかどうかは、1年生の学級づくりにかかっているといっても過言ではないと思います。

岡田　私は担任時代、「失敗が許される学級」づくりを目指していました。例えば、生徒が任されていた係の役目を忘れた時、他の生徒から厳しく指摘されることがありました。この時、忘れたことを単に責めていては、生徒は学級に居づらくなります。責任を感じてもらうことは重要ですが、同時に「次から頑張ればよい」という雰囲気を学級につくることが必要です。そうすることで、生徒は萎縮せず、前向きに次のことへ取り組めるのです。

こうした学級の雰囲気づくりは、担任の生徒への接し方にかかっています。例えば、「理科係はみんなへの連絡が遅れて迷惑をかけたけれど、実は理科の授業が終わってみんなが帰った後、残って片付けをしていたんだよ」と学級全体にひと声掛けるかどうかで、その生徒を見る目は変わるのです。「お互いさま」を意識させながら、「みんなのためにやって良かった」という自己肯定感を味わわせられるとよいでしょう。

委員会や学校行事を通じて生徒一人ひとりを見取る

壷内　生徒同士が支援できるような学級づくりには、リーダーの存在も重要です。担任が1日中、学級に入っているわけにもいきませんし、生徒の人間関係には担任の力だけでは解決できないことがたくさんあるからです。

岡田　リーダーの育成は居場所づくりとも関係があります。学級委員はAさん、体育祭はBさん、合唱大会はCさんと、委員会や学校行事などでそれぞれ活躍できる場をつくり、学級全員が意欲的にクラスにかかわり合えるようにしたいものです。

図4　学級づくりのポイント

- ☑ 一人ひとりに居場所がある
- ☑ 学級で役割があり、互いが認め合える
- ☑ 学級集団としてのルールや規範があり、守られている
- ☑ 心を開き、自由に自分の思いや願いが表現できる集団である
- ☑ 将来の夢や希望が語り合える雰囲気がある
- ☑ 教室環境が整備されている

図5　学年単位で必要な取り組み

- ☑ 教科間の指導方針をそろえる
- ☑ 各教科の特性を生かしながら、生徒を多面的に見取る
- ☑ 学年主任を中心に学年団として生徒に向き合う

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

壷内　確かに、生徒が互いに違いを認め合えるようになれば、誰にも居場所のある学級が出来ていきます。例えば、委員会や学級の係を決める際、生徒の意見を聞いて、一人ひとりに適した役割を任せられれば、生徒は自信を持ってやり遂げられるでしょう。その過程で、教師やクラスメートから認められ、励まされることで生徒は自信が付き、役割認識が芽生えていくのだと思います。

岡田　ただし、入学当初は担任であっても生徒の理解は不十分です。小学校から生徒の情報は提供されているものの、最初は役割を機械的に決めざるを得ないこともあります。4月、5月と互いが分かっていくにつれ、生徒からの推薦など、更に人間関係を深められる手法を取り入れられると思います。そのためには、普段の授業や学校行事を通して、私たち教師が出来る限り早く、生徒一人ひとりを見取っていく必要があるでしょう。

生徒の物差しで心のサインを察する

――生徒を見取るためにはどのような工夫がありますか。

岡田　私は、生徒の輪に入っていくのが一番だと思います。多くの学校でそうだと思いますが、1年生の担任は休み時間でもほとんど職員室にいません。生徒と話し、一緒に行動し、触れ合いながら理解しようとしています。

壷内　教師が生徒に心を開く必要もあるでしょう。自分を知ってもらうために、授業や休み時間、学校だよりを活用し、自分が何を考え、何を思っているのか、もっと情報発信をすべきです。私自身、生徒と共に生きる教師でありたい、小さなサインに気付いて子どもの心を察せられる教師でありたいと、生徒の心に近付くよう心掛けていました。

岡田　同感です。生徒の心のサインを教師が見逃さないことが大切です。授業を真面目に受けていた生徒が、ある日、ポケットに手を突っ込んで授業を受けていたとしたら、それは心が変化しているサインです。家で叱られて学校に来ている時、友だちとの関係がうまくいっていない時などは、生徒はいつもと異なる表情を見せるものです。そうしたサインは生徒によって異なります。教師は自分の物差しではなく、生徒の物差しでそれぞれのサインを察知できるようになりたいものです。

学年でのルールを統一し指導の足並みをそろえる

――学級づくりに関して、学年単位ではどのような取り組みが必要でしょうか。

岡田　中学校は学年単位で動きますから、1年生の導入期には学年主任が主導し、3年間を見通した基本的なルールを学年内で統一していくことが大切だと思います（**図5**）。細かいことですが、掃除後、机に載せた椅子を下ろして帰るのか、そのままにしておくのか。あるいは、給食は班で取るのか、前を向いて取るのかといった、生活習慣のようなことでも統一しておく方がよいでしょう。担任によって方法がばらばらでは、生徒が混乱するからです。生徒は「あの担任の方法がよい」「何でこんなやり方をするんだ」と言い出して、トラブルの原因にもなりかねません。

壷内　自校の生徒として身に付けなければな

らないことを学年団で共有し、3年間を見通して、1年生での指導の目標を決めることは必要です。教科担任制で複数の教師が指導に当たるからこそ、指導にばらつきが出ないように、足並みをそろえておくことは重要です。

岡田　それが教科担任制のデメリットであり、メリットでもあります。教室に次から次へと別の教師が入り、生徒はいろいろな先生と話が出来ます。たとえ担任とうまくいかなくても、他の先生とは話しやすいということもあります。複数の教師の目で生徒を見て、学年団というチームで生徒を指導できるからこそ、さまざまな生徒に対応できるのです。

壷内　教科間での連携は、生徒を見取る上でも重要になります。

岡田　私の専門は理科ですが、授業での経験からいうと、実験や体育、音楽などの活動的な場面では、生徒の本質が表れやすいと思います。実技教科も含めて、教師が授業中に察した生徒の情報を教師間で共有することは、生徒理解を深める上で重要だと思います。先生方は多忙だと思いますが、休み時間などに気になったことはきちんと担任に伝えるなど、意識的に行いたいものです。

生徒のために学年団としてのまとまりを

――学年団のまとまりはどのようにしてつくるのでしょうか。

壷内　若手教師やベテラン教師、教科指導に長けている教師、生徒とコミュニケーションを取るのが上手な教師など、年齢層や得意分野が多様な教師で学年団は構成されています。個性豊かな教師がチームの一員として、生徒のために動くことが重要なのです。同じ学年の担任が休んだ時に、副担任や他の担任が入っても、その学級が運営できるようにしておきたいところです。

岡田　学校も1つの組織ですから、学年団にまとまってもらうことは大前提です。たとえ生徒たちに落ち着きがなかったとしても、学年の先生方が団結していればなんとか乗り越えられるものです。

壷内　その中でキーマンとなるのはやはり学年主任でしょう。リーダーシップや人間的な信頼性などいろいろ能力を求められますが、やりがいのある役割だと思います。

【導入期指導のポイント②　学習習慣の定着】スモールステップで入学直後の意欲を維持

少しでも努力すれば、今より力が付くと実感させる

――学級づくりの他に、導入期の指導で大切なことはどのようなことでしょうか。

岡田　「学習習慣の定着」だと思います。入学当初、生徒は教師から指示されると、素直に学習計画を立てて学習してきます。ところが、中学校の学習が難しくなるにつれ、言われた通りに作った学習計画と、自分の学力のギャップが次第に広がっていく現実に直面するようになります。教師に「頑張れば出来る」と言われても、現実には計画通りに出来ない自分がいるわけです。

しかし、出来ないからといって諦めてしまっては、学習から離れてしまう一方です。入学時には程度に差はあれ、新鮮な気持ちから学習意欲が高まっているものです。その意欲を維持できるような声掛けや課題の出し方の工夫が必要だと考えます。たとえ思い通りに学力が伸びなくても、少しずつでも努力を積み重ねただけの成果や達成感を得られるような課題を与えて、努力を続ける意欲を持たせてあげたいと思います。

壷内　同感です。学習を続け、習慣化するためには、どんなに小さくても達成感が必要です。私の担当教科は数学ですが、教師時代、授業の終わりに必ず小テストを実施していました。5分間で2問ほどに取り組むもので、例題レベルの易しい問題です。ほとんどの生

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回
「中学生にする」導入期指導の工夫

徒が満点となるようなテストでも、生徒は正解すればうれしいものです。授業ごとにこの小さなステップを積み重ねることによって、学習意欲を維持させ、家庭での学習が習慣になるようにしていました。

校長の役割
生徒・保護者と学校の信頼関係を支える

校長の声掛けが生徒の自信につながる

――校長として、導入期の指導で心掛けるべきことは何でしょうか。

壷内　私は校長時代、出来るだけ生徒に声を掛けるようにしていました。生徒にとって校長と話をするのは、それなりに大きな出来事ですから、家で必ず保護者に「校長先生にこんなことを褒められた」と報告するでしょう。保護者はそれを聞き、我が子を褒めると思います。これが自己肯定感となり、生徒のやる気や自信につながります。また、保護者にとって生徒の声は何よりの学校情報です。「生徒をしっかり見てくれている」と学校に安心感を抱くことにもつながるでしょう。

岡田　4月は校長も忙しい時期ですが、私も出来る限り自分の目で教室を見て回るようにしています。私が校長になって感じるのは、担任が生徒の良い面、悪い面も全て見た上で指導するのに比べ、校長は普段、生徒とかかわる機会が限られている分、生徒の良い面を見て指導する機会が多いということです。もちろん悪い面を見れば指導をしますが、校長になってからは、生徒の良さを見付け、先生方に伝えたり、全校生徒の前で褒めるたりすることが、自分の役割だと思ってきました。特に、全校生徒の前で褒めることは、生徒だけでなく、その担任にとってもうれしいものです。おのずと校長と担任の先生との距離も縮まります。

壷内　導入期から積極的に声を掛け、校長の立場から、生徒の意欲の向上や保護者と学校の信頼関係の構築を支えることは重要だと思います。私は校長時代、自分の立場や影響を考え、生徒の良い面を忘れないように常にメモを取り、担任に伝えるようにしていました。

岡田　常に前向きな気持ちになれるように、ただし、入学直後は、頑張り過ぎる生徒もいるので注意が必要です。スタートダッシュは重要ですが、長い目でみて生徒を励まし、一人ひとりの生徒に合わせて具体的なアドバイスをしていきたいものです。

遅刻の多い生徒には「学校に来るのが少し早くなったね」と言い方を工夫します。校内のことに最終的に責任を取るのは校長です。校長の立場なりに、生徒や保護者、更には教師との信頼関係をきちんと築いておくことは必要だと思います。

壷内　生徒の入学当初の不安が、学校への不信に変わることのないよう、まずは学級、学年、ゆくゆくは学校全体で生徒を見取り、接していく体制を校長からつくっていくことが大切です。校長が代われば学校が変わると言われるように、学校を前より少しでも良くするのが校長の役目ではないでしょうか。

――本日はいろいろな示唆をありがとうございました。

導入期指導で心掛けるポイント

- 普段の授業、委員会活動や学校行事などを通して学級づくりを行うと同時に、生徒一人ひとりへの理解を深める
- 生徒が「出来ない自分」に直面しても勉強を諦めないように、努力すれば達成感を得られる具体的なスモールステップを準備して学習習慣を育む
- 生徒の入学当初の不安を学校への不信にしないために、学級や学年はもとより、学校全体で生徒を見取る体制をつくり、生徒・保護者と学校の信頼関係を築いておく

学校事例 1

自主学習の指針を明確にして4月から学びのペースをつかむ

山形県 東根市立神町（じんまち）中学校

部活動の忙しさなどから、なかなか家庭学習習慣が定着せず、学習につまずく生徒が見られた東根市立神町中学校。家庭学習の指針となる学習シラバス、学習のペースメーカーとなる単元テストなどを導入し、入学したばかりの生徒に中学校の学びのペースをつかんでもらうことを重視している。

課題

- 学校行事や部活動には意欲的に取り組む一方、落ち着きがなくまとまりに欠ける面も見られる
- 入学直後の導入期に学習習慣を身に付けられず、学習面のつまずきをその後も引きずる生徒が見られる

取り組み内容

- 自主学習の指針となる単元ごとの「学習シラバス」を導入。単元全体を見通しながら学習を進められるようにした
- 学習を進める上でのペースメーカーとなる単元テストを導入
- 自学ノートを友だち同士で見せ合って学び合いを促すなど、終わりの会を活用する
- 学級活動に力を入れて、学級全体で学び合う雰囲気をつくる

成果

- 1年生の早い時期から中学校の学習のペースをつかめるようになった
- 家庭学習が習慣化すると共に、学習方法が定着し、学習内容の質も高まった
- 自学ノートの交流では学び合いが促され、自主学習のレベルが高まった
- 学級全体で学びの意義について共有でき、学び合う雰囲気が生まれた

今後の課題・改善の方向性

- 学力下位層の生徒も学習シラバスを使いこなせるように内容を見直し、個別に指導も行う
- 自主学習の充実を図るため、上級生のノートを見せて、意識向上を促す

School Data

◎1994（平成6）年開校。果樹園や住宅地に囲まれた地域にある。「礼儀正しく、覇気があり、凛とした学校」を目標とし、龍のように勢いのある「龍勢神中」を合い言葉とする。

校長◎大内敏彦先生

生徒数◎398人　学級数◎14学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒999-3737　山形県東根市大字若木 5988

TEL◎ 0237-48-3375

URL◎ http://www.school-higashine.org/jinmachi-jh/

公開研究会◎ 未定

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

何から勉強すればよいか 学び方が分からない

サクランボやリンゴなどの果樹栽培が盛んな地域にある東根市立神町（じんまち）中学校。校区には工業団地や自衛隊駐屯地があり、宅地造成が進んでいることから、県内では人口が増加している地域だ。新旧の住民が入り混じり、地域の環境が安定しないことで、学校に荒れが見られた時期もあった。大内敏彦校長は生徒の様子を次のように語る。

「本校の生徒は意欲が高く、学校行事や部活動に熱心に取り組みますが、落ち着きがない生徒もおり、まとまりにくいこと、また部活動で疲れてしまい学習面がおろそかになりやすいことが課題でした。特に1年生にとって入学直後の数か月は、3年生と一緒に部活動を行うのは体力的に厳しいものです。次第に勉強がおろそかになり、授業が分からなくなるという状態を食い止めたいと考えました」

1年生での学習面のつまずきを後々まで引きずる生徒もいるため、1年生は5月の連休明けまで部活動を1時間早く切り上げて帰宅させている。ただ、それだけで生徒の学習面のつまずきが減るわけではない。

「授業内容の定着には、家庭学習が不可欠です。中学校では、学校から課された宿題に取り組むだけでなく、自主的な学習が求められます。そうした姿勢や習慣は入学直後の意欲の高い時期から指導を始めることで定着させやすく、この時期を逃すと、生徒は3年間をだらだらと過ごしかねません」（大内校長）

また、学習面でつまずく生徒が抱えている共通の悩みとして「学び方が分からない」ことがあると、大内校長は話す。

「生徒から『家で勉強しようと思っても、何から勉強すればよいのか分からない』という悩みを聞くことがありました。そこで、学習習慣の定着が不十分だった生徒も含め、全ての生徒が、自分の理解度に合わせて自主的に学習できるような学びの指針を伝え、少しずつ学習習慣を定着させようと考えました」

学習シラバスと単元テストで 学び方と学習のペースをつかむ

同校が行うのは、学習シラバスと単元テストの組み合わせによる指導だ（P.13工夫①）。まず入学直後の各教科のオリエンテーションで、授業の受け方や家庭学習の進め方など中学校での学習の基本を説明し、中学生としての学習姿勢を伝える。そして、自主学習を進める上での指針となる学習シラバスを配布する。これは、国立教育政策研究所の山森光陽主任研究官を講師に招いて研修を重ねながら、全教科について単元ごとに学習内容をまとめた独自のものだ。研究主任の田中恵理子先生はこのねらいを次のように話す。

「小学校にはない新たな教科が始まる中で授業がどんどん進むと、生徒は『自分は付いていけるだろうか』と不安になります。シラバスによって現在の理解度が分かり、『今何を学び、それがどうつながっていくのか』という見通しがつくことで、安心し、学習に集中できるようになります。常に全体を見通しながら学ぶことで理解度も高まると考えます」

学習シラバスを見ながら自主学習を進めるように指導するため、「家で何を勉強すればよいのか分からない」ことも少なくなる。そして、学習シラバスに対応する形で単元終了時に単元テストを実施する。このように学習

東根市立神町中学校校長
大内敏彦 Ouchi Toshihiko
「目の前の課題を主体的に捉え、それを解決していく気力と手段を身に付けさせたい」

東根市立神町中学校
田中恵理子 Tanaka Eriko
研究主任。「さまざまな出来事に立ち向かえる意欲と持久力を持ってほしい。生徒と『素』で向かい合う」

東根市立神町中学校
門脇豊光 Kadowaki Toyomitsu
1学年主任。「一人ひとりの生徒の良さを伸ばし、将来への夢を持てる生徒を育てたい」

東根市立神町中学校
後藤玲子 Goto Reiko
1学年担任。「生徒の良さを見付け、励まし、勇気付けることで、生徒は自分自身の力で伸びていく」

シラバスは自主学習の指針となり、単元テストは単元の理解度を測るというペースメーカーの役割を担うわけだ（図1）。

「中学校では定期考査に向けて計画的に学習を進めることが求められます。初めての経験に上手く対応できない生徒もいますが、単元テストは出題範囲が限られているため対策は比較的容易です。その積み重ねが定期考査の対策にもなるのです」（大内校長）

図1　導入期の活動の流れ

	4月	5月	6月	7月	8月
学習シラバスの活用	シラバスの活用の仕方について、教科別オリエンテーション	← 各教科の授業と家庭学習でシラバスを活用 →			シラバスの活用について自己評価
単元テスト	← 毎週火曜日の6校時に実施　2教科×25分 →				
学級活動	← 1～2か月に1回、終わりの会に生徒同士で自学ノートを見せ合い参考にする。また、諸テストへの取り組みを振り返る →				
	中学校の学習、自主学習の仕方を学ぶ			学ぶ意味について考える	
主な行事	・入学式 ・生徒会オリエンテーション ・家庭訪問	・中間考査 ・生徒総会 ・1年宿泊研修 ・ボランティア	・期末考査 ・地区中学校総体 ・教育相談	・終業式 ・県中学校総体	・始業式 ・運動会

＊同校の資料を基に編集部で作成

生徒の学び合いを促進する自学ノートでの交流

家庭学習は自学ノートを用いて行い、毎日ノートを提出する（P.15工夫②）。生徒の自主性を重んじ、取り組む内容は統一していないため、生徒によって内容や取り組み方法にばらつきが生じることもある。そこで、グループでノートを見せ合い、良い点や改善点などをアドバイスし合う機会を設けている。1学年担任の後藤玲子先生は次のように説明する。

「学習の進め方にも、生徒それぞれの個性があります。友だちがどのような家庭学習をしているのかを知り、互いの良いところを取り入れてもらいたいと思います」

教師の指導によってではなく、友だちのノートを見たりアドバイスを受けたりして、自ら「気づく」ことがポイントだ。多くの生徒が、効率的なまとめ方を学んだり、友だちの充実したノートに刺激を受けたりするという。

家庭学習の習慣化などに効果 学力下位層への対応が課題

これらの取り組みは、大きな成果をもたらしている。学習シラバスに関するアンケートで「好きになった教科や嫌いではなくなった教科がある」「ポイントを押さえて学習するようになった」「ほぼ毎日勉強するようになった」を肯定する割合が1年生で高い傾向が見られた。今後もこの指導を継続する考えだ。

「学習シラバスは、教師にとっても制作過程が最高の教材研究になり、全体的に授業力が高まっていると感じます。また、学習シラバスと単元テストという一貫した指導と評価のシステムを導入することで、生徒も教師もぶれずに学び、指導できるようになってきました。新学習指導要領の全面実施に向けてのよい準備にもなりました」（大内校長）

自学ノートの交流は「皆で協力して勉強を頑張ろう」という学び合いの雰囲気を生み、学級づくりにも大きな役割を果たしている。また、学習意欲にも変化が見られるという。

「特に学力中位層の生徒が学力上位層の生徒から刺激を受け、ノートをまねしたり、家庭学習に積極的に取り組んだりするようになりました。ノートの見せ合いを介して、人間関係の深まりも見られます」（後藤先生）

課題は、学力下位層の生徒が学習シラバスを使いこなせていないことだ。内容の見直しと共に、生徒によっては個別指導も考えている。また、自学ノートでは、上級生の自学ノートを見せて学力上位層の意識向上を促すなど新たな試みを検討している。こうした指導改革を教師全員が参加して進めていく考えだ。

「校長が1人で変えようとしても学校は変わっていきません。学校全体で変えていくというムードをつくり、生徒の力を伸ばしていきたいと思います」（大内校長）

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

工夫① 学習シラバスと単元テストによる学習習慣の定着

3ステップの要素がある学習シラバスと単元テスト

どの学力層の生徒にも学習習慣が定着するようにと始めたのが、学習シラバスと単元テストだ（P.14図3）。この2つは「自己制御学習理論」に基づいて作成されている（図2）。自己制御学習理論は、①計画の段階、②遂行の段階、③自己評価の段階で構成される。それを同校の取り組みに当てはめると次のようになる。

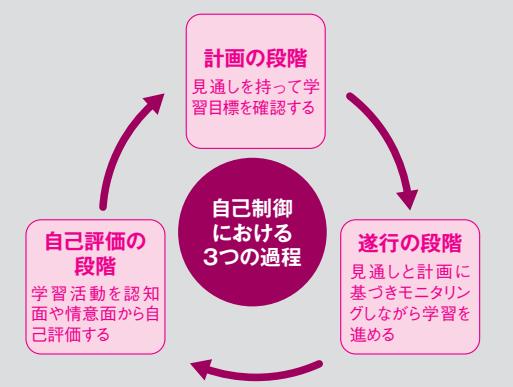
①その単元を学習すると、何が出来るようになるのかが分かる

②学習事項を身に付けたかどうかを知るために、また、不十分だったところをしっかり身に付けるために、家庭ではどのような学習に取り組めばよいかを考える

③学習事項が定着したか、また定着に向けて努力できたか、改善点はどこかを自己評価する

学習シラバスで単元全体を見通した上で自分で計画を立てて学習し、その成果を学習シラバスの理解度チェック欄や単元テストによって評価する。このサイクルを通じて自律して学習する力を付けていくというわけだ。

図2　自己制御学習理論



*文献を参考に編集部で作図：Zimmerman, B. J. "Sociocultural influence and students' development of academic self-regulation: A social-cultural perspective." In D. M. McInerney & S. Van Etten (Eds.), Big theories revisited. Greenwich, CO: Information Age Publishing. pp.139-164 (2004).

1年生の導入期は自己肯定感の醸成に重点

学習シラバスと単元テストは3年間を通して取り入れているが、学年によって目的は異なる。1年生では「学習すれば出来るようになる」という自己肯定感が学習習慣の定着に結び付くという考えから、学習シラバスの内容に合わせて、漢字や英単語、重要語句に関する出題がされる。そのねらいを1学年主任の門脇豊光先生は次のように説明する。

「単元テストは、きちんと復習すれば誰でも高得点を出せる内容にしています。目標を80点など高めに設定し、それを上回ることで次も頑張ろうという意欲を引き出すためです。目標点を下回った場合は、再テストをしてしっかり定着させます」

1年生の早い時期に自主学習への意欲を高めると共に、中学生の学習ペースに慣れさせる。そして、2年生の単元テストでは段階的に応用的な問題を、3年生の単元テストでは受験対策になるような問題を出題する。

学習シラバスの内容は教科や単元によって異なる。数学の場合は「この問題が解けますか」と、単元の最終的な目標となる問題を示すことがある。それにより、生徒に見通しを持たせて、問題を解きたいという気持ちを授業への意欲に結び付ける。

理科の場合は、実験結果などを先に示すと関心が低下するおそれがあるため、空欄などにして作成する。導入を工夫したい単元では、授業を1、2時間行ってから学習シラバスを配布したり、発展的な内容として補助資料や発展資料などを掲載したりすることもある。

今後、学習シラバスを通じて、保護者との連携を強化する考えだ。学習内容や評価項目について伝え、ゆくゆくは家庭学習を支援してもらえればと期待している。

図3　学習シラバスと単元テスト　１学年社会の例

学習シラバス

組　　番　　氏名

◆第１学年社会シラバスNo.１　【地理単元1　世界の姿をとらえよう】

時間	授業日 ／	内容 授業でがんばろう	重要語句 家庭学習でがんばろう	理解度チェック ABCで	家庭学習 復習したら○	対応ページ
1	／	☆六つの大陸と三つの大洋をながめてみよう ・地図帳を使って、大陸と大洋を調べてみよう。	◎世界地図に書き込もう。	ＡＢＣ	用語練習 ワーク p2~3	地理教科書 6~7p
2	／	☆旅行してみたい国をさがそう ・地図帳を使って、たくさんの国の名前と位置を調べよう。	中華人民共和国 ロシア連邦 イギリス オーストラリア フランス エジプト アメリカ合衆国 カナダ ブラジル インド オセアニア州 アジア州 アフリカ州 ヨーロッパ州 北アメリカ州 南アメリカ州	ＡＢＣ	用語練習 ワーク p2~3	地理教科書 p8~9
3	／	☆いろいろな国の面積を調べよう ・統計資料を使って、面積の大きい国を第５位まで調べよう。 ・世界で一番小さい国を、地図帳で探そう。	１位ロシア連邦　２位カナダ ３位アメリカ合衆国　４位中華人民共和国　５位ブラジル ６位オーストラリア 世界で一番小さい国 →バチカン市国	ＡＢＣ	用語練習 ワーク p4	地理教科書p10~11
4	／	☆いろいろな国の国境線を調べよう ・地図帳を使って、国境線がどのような地形になっているか調べよう。 ・アフリカ州に直線の国境線が多いのはなぜか。	国境線　内陸国　島国 ・国境線は川、山脈、湖などがもとになっている。	ＡＢＣ	用語練習 ワーク p5	地理教科書p12~13
5	／	☆緯度と経度を使って、国の位置を確かめよう ・緯度と経度を理解しよう。 ・国や都市の位置を説明しよう。	緯度　緯線　赤道　北緯 南緯 経度　経線　本初子午線 日付変更線　東経　西経	ＡＢＣ	用語練習 ワーク p6	地理教科書p14~15
6	／	☆緯度の違いで何が変わるか調べよう ・緯度が違うと、季節が違うことを理解しよう。	北極圏の夏→白夜 日本が夏の時、オーストラリアのメルボルンの季節は何か。	ＡＢＣ	用語練習 ワーク p6	地理教科書p16~17
7	／	☆経度の違いで何が変わるか調べよう ・時差を求めよう。	標準時　時差　日付変更線	ＡＢＣ	用語練習 ワーク p7	地理教科書p18~19
8	／	☆地球儀と世界地図の違いに気づこう ・地球儀と世界地図で、ニューヨークでの最短コースを考えてみよう。 ・様々な世界地図の使い方に気づこう		ＡＢＣ	用語練習 ワーク p8	地理教科書p20~21
9	／	☆世界の略地図を書こう ・様々な略地図の書き方に挑戦しよう		ＡＢＣ	用語練習 ワーク p8~9	地理教科書p22~23
			◎単元のまとめをしよう		p10~13	

単元全体を振り返って	自己評価(ABC)
・意欲的に、資料集や地図を使って調べることができましたか。	(　　)
・自分の考えをまとめたり、発表することができましたか。	(　　)
・資料集や地図帳をうまく使うことことができましたか。	(　　)
・新しい語句や国名を覚えることができましたか。	(　　)

感想

単元テストの結果

組　　番
氏名

内容・重要語句
単元の学習の流れを示すことで見通しを持って授業に臨むことができ、家庭での学習の指針にもなる

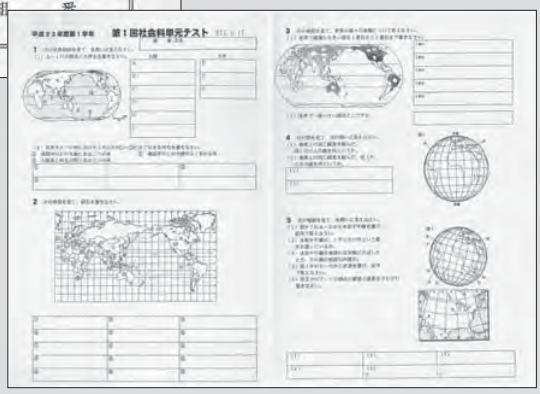
理解度チェック
その日の学習内容が理解できたかの自己評価を通して、計画的に学習状況を振り返る習慣を身に付けさせる

家庭学習・対応ページ
理解が不十分な時に、どこを復習し、どの資料を参考にすればよいのかが分かるようになっている

単元テストの結果
単元テストは、学習内容の確実な定着を図るための１つの評価で、指導改善の一助となるもの。生徒にとっては日々の家庭学習の目標になり、学習習慣のペースづくりにもつながる

単元全体を振り返って・感想
学習内容の定着に向けて努力が出来たのか、情意面からの自己内省を行う

単元テスト



１年生の単元テストは、「やればできる」という自信と学習意欲を高めるために基本的な学習内容を出題している

＊同校の資料をそのまま掲載

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回
「中学生にする」導入期指導の工夫

工夫② 自学ノートの交流や学級活動で学び合いを促す

自学ノートの交流で家庭学習の質が向上

生徒の学び合いによって家庭学習の質を高める目的で、1～2か月に1回実施するのが自学ノートの交流だ。帰りの短学活で20分程行う。定期考査の2週間前など、特に家庭学習に力を入れてほしい時に行うことが多い。

交流の流れは次の通りだ。まず生徒は4、5人のグループをつくり、互いの自学ノートを見せ合い、良い点や課題など気付いたことを付せんに書いてそれぞれノートの表紙の裏に貼る（**写真1**）。時間がある時は、友だちのコメントを踏まえ、今後の改善策などをまとめたり、他のグループのノートを見たりすることもある（**写真2**）。

付せんに書かれるコメントは、「色を使っていて見やすい」「もっと字を小さくすればたくさん書ける」「きれいにまとめられていて、まねをしたいと思った」などさまざまだ。

「他の生徒がどのようにノートを使っているかは気になるものですが、普段、見る機会はありません。学力層にかかわらず、友だちの上手なノートに刺激を受けているようです。『私も毎日きちんと提出しなければ』と、積極的に自学ノートを提出するようになった生徒もいます」（後藤先生）

交流を続けるうちに、目に見えてノートのまとめ方が上手になっていく生徒も多い。単に学習内容をまとめるだけではなく、その内容を基に問題を自作する生徒が現れた時には、その学習方法が他の生徒に広がっていったこともある。

自学ノートの内容から、一人ひとりの学習に対する姿勢や意欲も把握できると、門脇先生は話す。

写真1　言葉を交わしながらお互いのノートにコメントを書いた付せんを貼る。皆に見られるという緊張感から、おのずと自学ノートのまとめ方も丁寧になるという

「生徒一人ひとりの良さや課題が見えてきて、その後の指導にも生かせます」

同校では学級や学年の集団づくりに力を入れているが、学び合いを促す自学ノートの交流はその点にもよい影響をもたらしている。

「生徒の学習の意欲には個人差があり、1人でペースをつかみ、学習していくことが難しい生徒もいます。集団から刺激を受けると同時に、自分の進め方を振り返る場になってほしいと思います」（後藤先生）

「1人で取り組むのは難しくても、皆と一

写真2　全体的に友だちのノートの良さについて肯定的なコメントが多い。この日は最後に友だちのコメントを踏まえて自分の自学ノートの改善点をまとめた

緒なら頑張れるという意識が大事です。勉強の仕方を学び合おう、将来について共に考えようという意識を持った集団をつくりたいと考えています」（大内校長）

学びの意味を皆で考えて学び合いのある学級をつくる

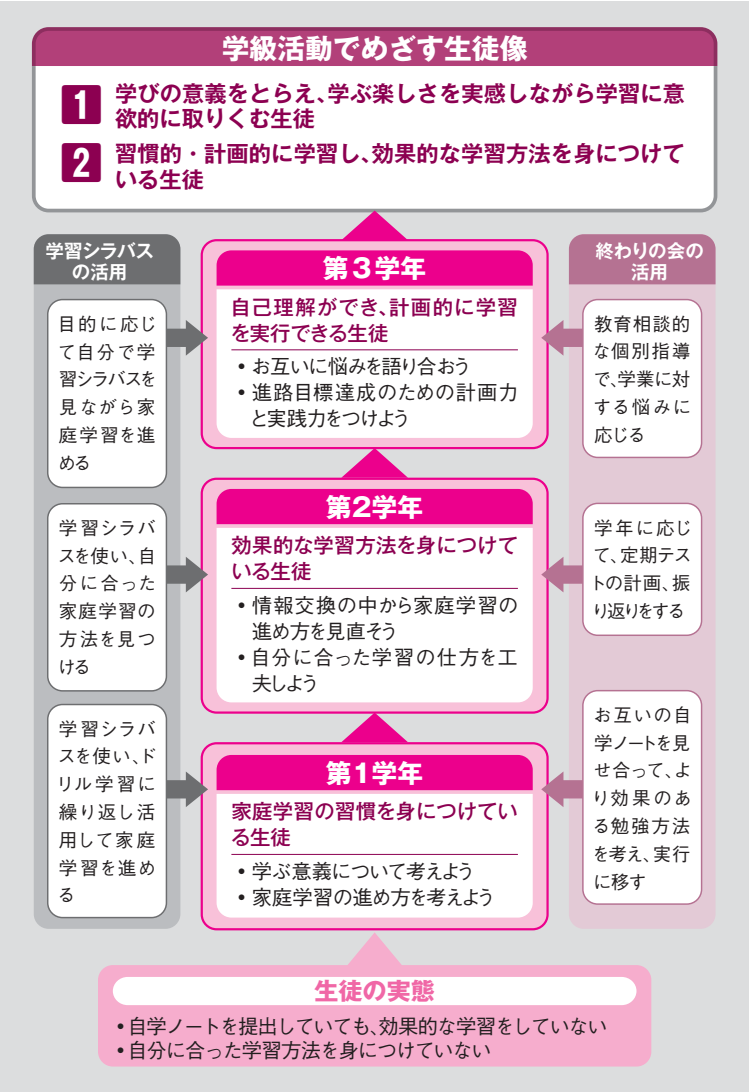
学級活動では、「学びの意義をとらえ、学ぶ楽しさを実感しながら学習に意欲的に取りくむ生徒」「習慣的・計画的に学習し、効果的な学習方法を身につけている生徒」を目指す生徒像としている（図4）。

この目標に向けて、学びについて学級全体で考える活動も行う。11年度の1年生では、「なぜ、わたしたちは学ぶのだろう」をテーマに、学ぶことに対する意識や関心の程度を振り返った。保護者や祖父母などに学びの必要性についてインタビューをしてまとめ、グループで話し合いをしたが、社会に出ている大人にインタビューをすることによって、中学校だけではなく、その先を見据えて学びの重要性について考えた生徒が多かったようだ。生徒は次のような感想を述べている。

「『勉強は大事だと思ったのはいつか』という質問に対して『社会に出て気付いた』という答えが返ってきて、『なるほどな』と思った。勉強は社会に出るためには大事なのだと思いました」「将来の夢をはっきりと決めていないので、これから探していこうと考えました。自分のしたい仕事を見付けて、その仕事に活用できるように勉強を頑張ろうと思いました」

こうした学級活動を通して、一人ひとりが学びの意義を理解し、また学び合いのある学級集団をつくり上げることで、相乗的な効果が表れることを期待している。

図4　学業指導にかかわる学活全体構想計画



＊同校の資料を基に編集部で作成

大内校長が考える校長の役割

中学校３年間で「大人になったら何か良いことが待っている。自分は幸せになれるはずだ」という将来に期待を持ち、未来を切り開いていくエネルギーに満ちた生徒に育ってほしいと思います。生徒一人ひとりが自己実現を図るための学力を保障することは、校長としての責務の１つです。学習シラバスや単元テストの取り組みを導入期から取り入れ継続することで、生徒に学び方と学習のペースをつかんでもらい、自学自習の出来る生徒を育てたいと考えています。また、学習や部活動、行事を通して、自分一人ではなく、チームで取り組んで皆で成し遂げる大切さも伝えていきたいと思います。

学校事例 2

縦と横の人間関係を築き新入生の意欲と思いを支える

静岡県 沼津市立原中学校

縦割り活動班（ファミリー学級）による上級生と下級生の縦のつながりと、生徒同士の自己開示（グループエンカウンター）を通したクラスメート同士の横のつながり。沼津市立原中学校は、入学直後から縦と横の人間関係づくりを目的とした活動を積極的に取り入れ、生徒の実態を把握すると共に、新入生のスムーズな中学校生活への移行を目指している。

課題

- 先輩や同級生との人間関係に不安を抱えて入学する生徒がいる
- 初めての定期考査が終わり、行事続きの時期を過ぎた６月頃から問題行動や不登校が増える傾向にある
- 自分の感情を表現することや相手の立場に立って考えることが苦手

取り組み内容

- 縦割り活動班ファミリー学級を導入。入学時から上級生と下級生を交流させ、異学年のつながりを深める（縦）
- グループエンカウンターを取り入れ、学級の人間関係づくりに役立てると共に、生徒の自己内省の機会を意図的につくる（横）

成果

- 一生懸命な生徒が認められる雰囲気ができ、落ち着いて学校生活を送れる生徒が増えた
- 入学当初は学級の輪に入れなかった生徒も、周囲の生徒が受け入れる雰囲気をつくることで少しずつ集団に加わるようになった
- 教科の授業や部活動以外の生徒の側面が見られ、教師の生徒理解が深まった

今後の課題・改善の方向性

- 新学習指導要領の全面実施に伴い授業時数が増加する中で、ファミリー学級の活動時間をどのように確保するか。その役割や機能を日常的な取り組みの中でどのように補うのか
- グループエンカウンターの手法や考え方を授業にも取り入れ、教科指導の中で人間関係をいかに築いていくか

School Data

◎ 1947（昭和 22）年開校。北には富士山を仰ぎ、南は駿河湾に面する風光明媚な環境にある。「不撓不屈（ふとうふくつ）」を校訓にした教育活動を展開。

校長◎ 芝 厚先生

生徒数◎ 506 人　学級数◎ 16 学級

所在地◎〒410-0312　静岡県沼津市原 576

TEL◎ 055-966-0138

URL◎ http://www.numazu-szo.ed.jp/hara-j/

公開研究会◎ 未定

6月に入ると緊張感が途切れ 問題行動や不登校が出始める

沼津市立原中学校は、5年程前までいわゆる荒れた学校だった。授業中に生徒がベランダに出て携帯電話で話していたり、他校生が同校のジャージを着て校内を歩いたりしていたこともあるという。そうした状況の中、同校は数々の取り組みを講じてきたが、その柱に据えてきたのは「一生懸命に取り組む姿勢を認め合う」文化の醸成だ。大川裕司教頭は次のように説明する。

「当時の本校には、リーダー役を担おうとする意欲のある生徒や真面目に取り組む生徒を、認めようとしない雰囲気がありました。荒れていたといっても、深刻な問題を抱えていたのはごく一部の生徒です。しかし、大半の生徒は、その一部の生徒がつくり出す雰囲気に流されていました。そこで、『一生懸命に取り組むことは格好いい』を合い言葉に、努力する姿勢を認め合い、支援し合う雰囲気のある学校にしようとしました」

校区には旧街道の宿場町があり、古くから住む家庭と移住してきた家庭が混在する。保護者の職業も農業や会社員など多種多様で、共働きの家庭も多い。新入生に関しては、校区にある2つの小学校との連携を進めてきたことによって、中学校入学時点の生徒の落ち着きは随分改善されてきた。しかし、小学校時代の友だち関係や家庭でのつまずきを、中学校に持ち越して入学してくる生徒は依然存在する。

そうした生徒も、「中学校で変わろう」という意欲や期待を持っている。しかし、不安と緊張感の中で過ごす4月、行事や初めての定期考査が続く5月を過ぎ、6月に入ると次第にそれまでの緊張感が途切れて疲れが見え始め、問題行動や不登校が出てくるという。

1学年主任の塩澤清孝先生は、導入期指導の基本的な考え方を次のように話す。

「入学直後の新入生の意欲や思いを受け止めて支える雰囲気を、学級や学校全体でいかにつくっていくかを大切にしています。よい雰囲気があれば、生徒はスムーズに中学校生活へ移行できます。これが3年間の中学校生活を大きく左右すると捉え、その観点から導入期指導を組み立てています（図1）」

ファミリー学級で新入生が上級生と積極的に交流

同校の導入期指導の大きな特徴は、入学直後から上級生との「縦」のつながりを積極的に深めることだ。交流の場となるのは、10年度に新しく組織し直した3学年の縦割り活動・ファミリー学級である。特活指導部長の永井豊二先生はそのねらいを次のように話す。

「学校が荒れていた頃は、出来るだけ異学年の交流を遮断するようにしていました。新入生が悪い意味で上級生を見習い、負の連鎖が生まれてしまうことを回避したかったからです。しかし、生徒同士をいつも引き離していては、学校全体が活性化されないと分かってきました。『離す指導』から『つなげる指導』へ、生徒の自主性を生かす方向へと転換しようと考えました」

沼津市立原中学校校長
芝 厚 Shiba Atsushi
「教師の成長が子どもの成長につながる。そのために、自分を日々磨いていきたい」

沼津市立原中学校教頭
大川裕司 Okawa Yuji
「生徒が30歳、40歳になった時に、社会人として生きていける力を身に付けさせたい」

沼津市立原中学校
永井豊二 Nagai Toyoji
特活指導部長、3学年担任。「いろいろなタイプの人間の良さを認められる人になってほしい」

沼津市立原中学校
塩澤清孝 Shiozawa Kiyotaka
1学年主任。「他者とのかかわりの中で生きていることを自覚し、身近な誰かを照らせる大人になってほしい」

沼津市立原中学校
長田成伸 Nagata Shigenobu
1学年担任。「生徒一人ひとりが安心して学校生活を送れる環境をつくりたい」

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

ファミリー学級では、3学年混合で行事や活動を共に行うだけでなく、行事の前後に上級生と下級生がメッセージを交換する（P.20工夫①）。

「ファミリー学級の行事を通して先輩・後輩の人間関係が出来ても、普段の生活では薄れてしまいがちです。学級の掲示板などを活用し、行事での経験を毎日の学校生活に少しでも生かせるようにしました」（大川教頭）

図1　導入期指導の流れ

	4月	5月	6月	7月
ファミリー学級	●リーダー講習会 ・上級生による新入生のリーダー指導 学級委員の役割確認、ファミリー学級発足式に向けての打ち合わせ	●ファミリー学級発足式 ・ファミリーネームの発表 ・ファミリーごとに活動内容を検討 先輩から後輩への勉強の仕方の伝授、協力清掃、交換合唱会の開催など	●2年生の高原合宿、3年生の修学旅行の迎え入れ ・掲示物を通したメッセージの交流	異学年の結び付きを、文化祭や生徒会活動などに生かす
グループエンカウンター	●ことばさがし ・新しい仲間との接点、関係づくりをする		●よいことカード ・他の生徒の良さを探し、自分の言動を客観的に振り返る	生徒同士の関係と、教師の生徒理解を深める
1年生全体の活動	●学級開き	●遠足 ・親睦を深める	●教育相談	●三者面談
学校全体の活動	・対面式 ・生徒会オリエンテーション ・教科リーダー会 ・生徒総会	・中間考査	・期末考査	・3年生を励ます会（部活動壮行会）

＊ 同校の資料を基に編集部で作成

メッセージは各教室の後ろの掲示板に貼ってあり、休み時間などに1年生が先輩のコメントを探している姿が見られるという。

「後輩との接点を増やしたことで、3年生の上級生としての自覚が高まりました。新入生の中には言葉遣いなどが分からず、なれなれしい言動をする生徒もいますが、そうした生徒もきちんと受け入れながら後輩を引っ張っていく姿が見られるようになりました」（永井先生）

1年生は入学直後から、直接的・間接的な活動を通して上級生を知る機会が増えたことで、上級生に対する先入観や不安を早期にぬぐい去ることが出来るようになった。最近では、上級生と良好な関係を築けるようになったことで「ああいう先輩になりたい」と憧れを抱く良い循環も生まれている。

互いの気持ちを引き出しながら安心でき、居場所のある学級に

縦のつながりと共に重要なのは、学級での「横」のつながりだ。そこで同校が心掛けているのは、まず「学級を安心できる、居場所のある空間にする」ことである。

1学年担任を務める長田成伸（ながたしげのぶ）先生は、「居場所が出来て初めて次のステップへ進めると考えています。最初は生徒同士、次に生徒と教師の距離を縮めていくことを意識しています」と話す。11年度に赴任した長田先生は、08年度から2年間、大学院に通い、問題行動を未然に防ぐための生徒指導を研究した。その知見を生かして、グループエンカウンターを取り入れた生徒同士の人間関係の構築や生徒把握を進めている（P.22工夫②）。

「以前は、中学生になってから問題が顕在化するだけで、原因は小学校時代や家庭環境にあるのではないかと思っていました。そのため、生徒の過去の経験や体験を出来る限り把握した上でどうかかわっていくかに注力していましたが、大学院での学びを通じて、中学校から出来ることをしていこうと考えを切り替えました。グループエンカウンターのエクササイズは互いの気持ちを引き出しながら人間関係づくりを進める上で効果的ですが、1回取り入れたからといってすぐに大きな変化が表れるわけではありません。繰り返し、粘り強く取り組んでいます」（長田先生）

グループエンカウンターの授業は、当初、長田先生が1人で始めたが、今では学年全体での取り組みへと広がっている。

「『まずはやってみよう』と誰かが何かを始めることが、前向きに捉えられるのは本校の良さだと思います。それがマイナスの方向に行くこともあるかもしれません。しかし、何もしなければ前には進めません」（塩澤先生）

次ページからは同校の導入期指導の特徴であるファミリー学級とグループエンカウンターの取り組みを具体的に紹介する。

工夫① ファミリー学級で縦（異学年）の関係を育む

中間層の生徒をリーダーとして育てる

ファミリー学級の組み方は、単純な学級の縦割りではない。11年度は、1年生6学級、2・3年生各5学級の全16学級を、4つのファミリーに組み替えた。

ファミリー学級の1年間は、「リーダー講習会」から始まる。11年度は入学直後の4月に開いた。講習会の対象者は、各学年の学級委員長と副委員長、専門委員長、生徒会本部の計63人だ。ファミリー学級は4つだが、これだけ多くの人数を集めるのは、出来るだけ多くの生徒にリーダー的な考え方を持たせるためでもある。

「どの学校にも課題のある生徒はいるものです。彼らを育てていくためには、まず落ち着いた生徒集団をつくることが必要であり、その鍵となるのはリーダーとリーダーを支える中間層の生徒を育てることです。リーダーが周りから支援されずに孤立してしまうと、集団の雰囲気が乱れてしまいます。逆に、『リーダーをやりたい』と思わせる雰囲気があれば、中間層にもリーダー的な考えを持つ生徒が増えます。学校全体にそうした前向きな雰囲気が出来ると、課題のある生徒も落ち着いていきます」（永井先生）

部活動で規律と人間性を、ファミリー学級で社会性を育む

1か月後の5月には「ファミリー学級発足式」を開く。ここではファミリー学級を構成する各学級の目標の紹介などを行う。

通年の主な活動に、上級生と下級生のメッセージの交換がある。例えば、3年生が修学旅行から帰ってきた時、1年生は「お帰りなさい」のメッセージを1人ずつ書いて模造紙に貼り、ファミリー学級の3年生に渡す。合唱祭の時には先輩の歌についての感想をつづって渡す。逆に、3年生も1年生の行事の前後にメッセージを一人ひとりに書いて渡す。

メッセージを持っていくのは、学級委員長ら生徒自身だ。1年生は最初、担任に付き添ってもらい恐る恐る3年生の教室に向かう。入学当初の1年生にとって3年生は大人のような存在で、3年生の教室の階に行くだけでも緊張するものだ。しかし、実際に教室に行ってみると、3年生は拍手をして、1年生を温かく迎え入れてくれる。1年生はこうした経験を通して、今後の中学校生活への安心感を抱いていく。

「3年生と身近に接することによって、1年生は『自分もああいう3年生になるんだ』と中学校生活の具体的なイメージを持てるのです」（大川教頭）

また、前期と後期に各1回、ファミリー学級単位の行事を開催する。前期はファミリー学級単位で海岸などを清掃する「校外清掃」で、後期は生徒会主催のレクリエーション大会をファミリー学級対抗にして、5・6時間目の2時間にわたって実施する（**写真1**）。

元々、中学校には部活動という、異学年の縦割りによる活動がある。しかし、部活動は先輩・後輩の上下関係が厳しくなりがちだ。これに対して、ファミリー学級は上下関係が緩やかだ。芝厚校長は、部活動とファミリー学級の違いを次のように説明する。

「部活動は同じ目標や夢を持つ生徒の集まりであり、規律や人間性が育つ場です。一方、ファミリー学級はさまざまな性格を持った生徒の集まりであり、社会性を育む場と捉えています。どちらも昔は地域社会に存在していましたが、今は学校の中で育てていくことが大切だと考えています」

活動後の生徒の感想には、「ファミリー学

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

級での先輩は、部活動での厳しい姿とは違い、面白く親しみやすかった。自分も3年生になったら下級生を楽しく引っ張っていきたい」（1年生男子）などがあり、人には多様な面があることを理解する場にもなっている。永井先生は「多くの1年生はファミリー学級で部活動以外での先輩の姿を見て、『あの先輩にはこういう姿もあるのだ』と他の面に気付くようになります」と話す。

教室の壁には、同じファミリーの上級生から送られたメッセージが貼られている（写真2）。これも、上級生を日常的に感じやすくするための工夫だ。同校は、こうした掲示物の活用を特に重視している。

写真1　11月下旬、5・6時間目の2時間かけて行われた生徒会主催のレクリエーション大会。4つのファミリー学級対抗形式で生徒たちは球技などを楽しんだ。企画運営は生徒会に全面的に任せ、教師はほとんど口出しをしない

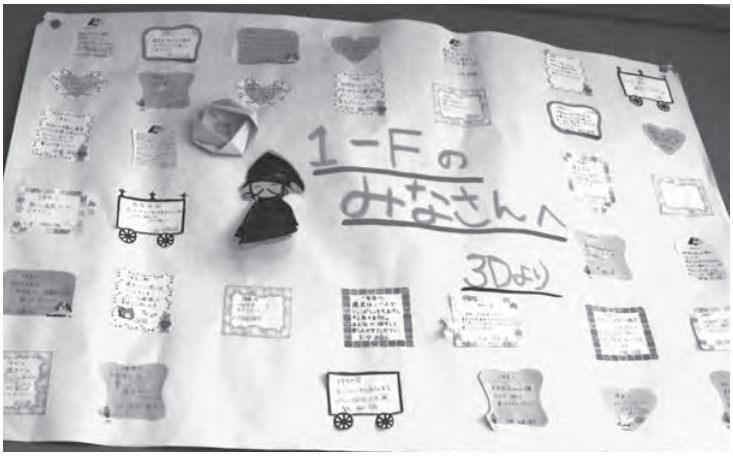


写真2　1年生の教室の後ろには、同じファミリーの上級生がつづったメッセージが貼られている（写真は3年生のメッセージ）

生徒が相談できる教師が増え教師間の連携も深まる

ファミリー学級では、ファミリーを構成する各学年の担任が活動にかかわるため、生徒と教師の関係を広げる効果もある。例えば、ファミリーのリーダーの会合では、主に3学年の担任が支援に入ることが多いが、不在の時には2学年や1学年の担任が入る。すると、ファミリー学級のリーダーは他学年の教師ともかかわりが生まれ、相談しやすくなる。

ファミリー学級は、教師にもよい効果をもたらしている。新たに異動してきた教師は1学年を担当することが多いが、同校の指導方法がどういうものか分からない。教師の間にも、ファミリー学級という学年を超えた縦のつながりを通して、他学年の指導方法を学びやすい関係が生まれている。

このため、ファミリーを構成する学級担任の顔ぶれは、特別活動担当の教師、ベテラン教師、若手教師といったバランスを考慮したものになっている。

授業時数が増える次年度以降活動をいかに深めるかが課題

今後の課題は新学習指導要領への対応だと、芝校長は話す。

「本校には、ファミリー学級活動を含めて行事が多くあります。今後は、授業時数の増加にどう対応して教育課程を組むかを検討する必要があります。現時点では、ファミリー学級の活動を日常的な清掃活動などに取り入れることも考えています」

学校行事が多いことで、教師に負荷がかかっていることも課題である。

「先生方の善意で成り立っているところがありますが、それに甘えてはいけません。職員会議の効率化など校務全体を見直して、工夫していきたいと思います」（大川教頭）

工夫② グループエンカウンターで横（学級）の関係を構築

「よいことカード」を通して自分自身の内面を見つめさせる

長田先生は、月1～2回の割合で、学級活動や道徳の時間などにグループエンカウンターのエクササイズを取り入れている。入学直後は人間関係づくりのきっかけになるようなエクササイズを取り入れ、学級内の人間関係が落ち着いていくにつれて、徐々にその内容を自分の内面や他者に深くかかわるものに移行していく。

4月の入学直後に行ったのは「ことばさがし」というエクササイズだ。これは、6人でグループを組み、長田先生が五十音の中から選んだ1文字から始まる言葉を出来るだけ多く探していく活動で、ランダムに選ばれたメンバーとの交流を深めていくのがねらいだ。

5月には「よいことカード」というエクササイズを実施する（**図2**）。

「エクササイズでは、接点があまりない生徒とペアを組むこともあります。そうしたクラスメートにもメッセージを書く必要があると同時に、自分もあまり知らない生徒からメッセージをもらう立場になります。入学直後の新しい人間関係の中で自分がどのように

図2　「よいことカード」の進め方と指導のポイント

段階	授業の内容と流れ	
1 出会い	● 行事での生徒の頑張りや印象に残ったことを話す	
2 エクササイズ (1)説明	●「よいことカード」の説明をする **第１段階** ①くじを引き、引いた人の頑張っていたところを見付け、カードを書く ＊１人１枚 ②カードをプレゼントする 書いた人のところへ行き、書いた内容を読み、手渡す **第２段階** ①行事を振り返って、自分が頑張っていたと思う人にカードを書く ＊１人１枚 ②回収して、掲示用とする	本時の方向付けの場面なので、目的を丁寧に説明する。授業の見通しを持たせることで、生徒の意欲を高める 書いた本人と受け取る相手、授業者の３人しか見ないことを伝え、相手が異性でも素直な気持ちで書くよう指導する
(2)くじ引き	●クラスの全員の名前が書かれたくじを引く 誰からももらえない生徒が出ないように、くじ引きなどで書く相手を決める	生徒全員が最後まで伝えたかをきちんと見取る。１人でも取り組まない生徒がいると、なし崩し的に他の生徒も取り組まなくなるので、緊張感を持たせる
(3)カード記入①	●くじに書かれていた人が、行事で頑張ったことやよかったことを、カードに記入する	
(4)カードをプレゼント	●書いた相手にカードをプレゼントする ＊声を出して相手に伝わるように読む ＊机間巡視をしながら、声を掛けるようにする→恥ずかしがって読まない生徒が出ないようにする	「他人の悪いところばかり気になり自分本位だったけれど、他人の長所をうまく探せない自分に気付きました」など、活動の良さが分かるようなコメントを書いた生徒に発表してもらう
(5)カード記入②	●今度は、自分が書きたい相手を決め、カードを書く ＊カードを回収し、掲示用にする	
(6)シェアリング	●カードをプレゼントされた時にどんな気持ちがしたかを書かせ、全員の前で何人かの生徒に発表してもらう	
3 まとめ	●授業者が授業の感想を話す ＊活動の様子、感想、まとめなどを伝える	「意外な生徒が自分のことを見ていてくれて驚いた。うれしかったという感想がありました」など、生徒が次の活動に前向きになれるようなコメントをする

＊ 同校の資料を基に編集部で作成

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

思われているか、また自分がどれだけ周りの生徒のことを考えられているかを知る機会になります」（長田先生）

長田先生の学級では、普段の生活班もくじ引きなどでランダムに決めている。

「生徒は、始めは緊張したり、気まずい思いをしたりするかもしれませんが、新しい人間関係の中で意外な共通点が見付かり、関係が深まることもあります。導入期からこのスタイルを取り入れることで、どのような関係の友だちとも話せるようにならないといけないことを伝えます。中学校では友だち関係は席替えに配慮されないと思わせてしまうのです」（長田先生）

エクササイズの時には、よく話す生徒、聞き役の生徒、あまりかかわらない生徒が出てくることもある。そこで、順番に話していくようなルールにしておく。

「皆で話をしやすいテーマを設定したり、みんなが話せるようなルールを決めたりしても、1人になりがちな生徒はいます。大切なのは、その生徒が1人になっていることではなく、その経験を生徒本人や周囲の生徒がどう捉え、どう生かすかです。グループエンカウンターの授業では、さまざまなテーマを通していろいろな立場を経験する中で、他人を思いやる気持ちを持ってほしいと伝えています。1人になりがちな生徒は、誰かの何気ない一言でほっとしたり、助けられたりするものです。次は自分が声を掛ける側として、経験をつなげてほしいと思います」（長田先生）

教科の授業の中で更に関係を深める機会を増やしたい

10月には「クラスの中の自分」というエクササイズを行った。これは、自分や仲間の長所を探していくものであり、生徒の自己肯定感を高めていくのがねらいだ。

「今日の授業はきつかった」。授業後、普段は積極的に発言するムードメーカーの生徒が、こんな感想を書いてきた。

「何も問題がないように見える生徒でも、実は自分の内面について悩みを抱えていたり、自分の気持ちを上手く表現できずに葛藤したりしていることがあります。教科の授業や部活動では見られない生徒の側面を意図的に引き出すことで、生徒理解を深めることが出来ます。生徒の感想を見ながら、次のエクササイズの改善につなげています」（長田先生）

入学当初、班から離れて1人で給食を食べるような生徒がいた。しかし、11月のグループワークではグループに加わり、周りの生徒とも話が出来るようになっていた。その生徒にとって学級が少しずつ居心地の良い空間になってきている証しといえるだろう。

長田先生はグループエンカウンターの指導案を学年団の教師に渡して共有しており、「よいことカード」は学年全体で取り入れた。10月からは学年全体で足並みをそろえて取り組むようにしている。

芝校長は、こうした人間関係の構築が学習面にも良い影響を与えると考えている。

「健全で豊かな人間関係の基盤があってこそ『分かり合う』授業が出来ます。生徒同士が互いを知り、協力できる関係を導入期から深めていくことは、学習面にも大いに役立つと考えています」

今後は授業の中で互いを知り、高め合える学びの実現を目指していく予定だ。

芝校長が考える校長の役割

中学校3年間という時間は決して長い期間ではありませんが、生徒には中学校生活の中で出来る限り多くの経験を積んでほしいと思っています。そして、教職員全員で、生徒が見せるうれしそうな表情、真剣に取り組もうとする表情、感動し涙する表情、やり遂げた達成感のある表情などを見取り、支援していきたい。

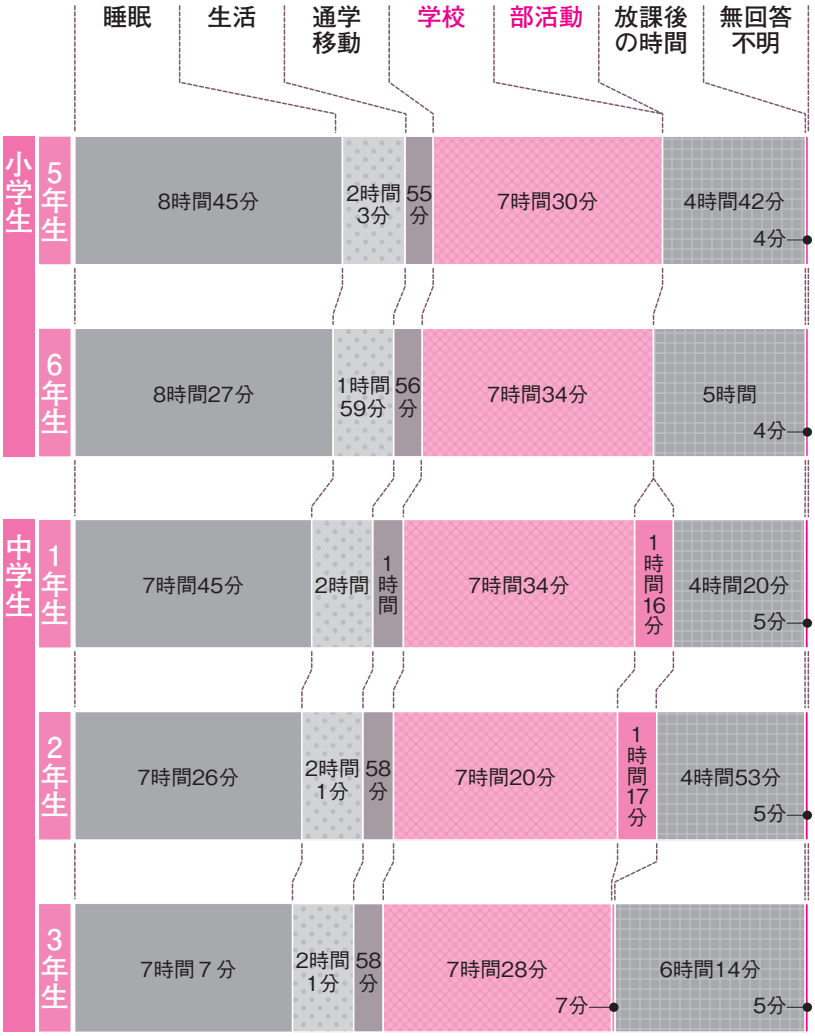
そのためにも、校長として自分自身を磨く努力をしながら、先生方の力を結集し、常に前向きに物事に取り組み、生徒にとってより良い環境を築いていきたいと思います。

戸惑い悩む中学1年生
―調査データから見た実態

小学校から中学校へ進学する時に、子どもを取り巻く生活や学習に関する意識はどのように変化するのか。中学校入学の前後の差に着目して、その実態を見ていく。

1 1日の3分の1以上を学校で過ごす中学1年生

Q あなたはふだん、次のことを1日にどれくらいの時間していますか。日によって違うときは、平均してだいたいの時間を教えてください。



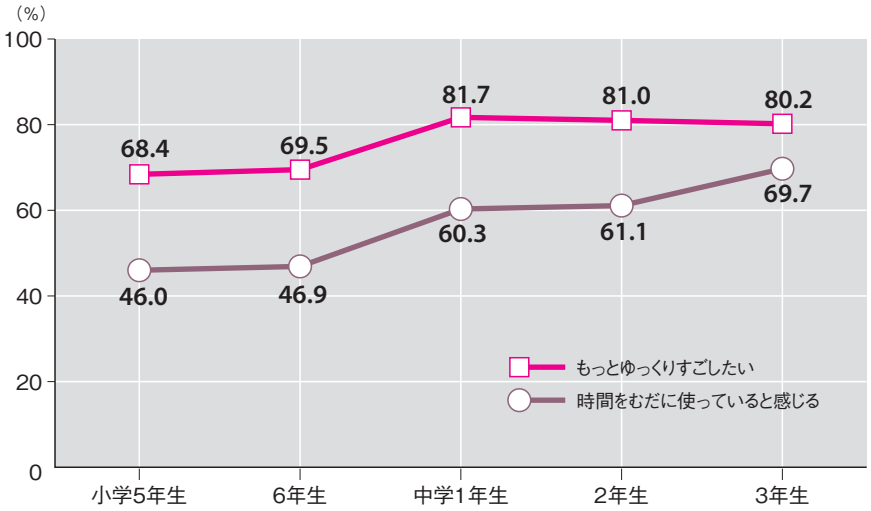
注１）「放課後の時間」は、学校＋部活動以外に子どもが自由に使える時間
出典／Benesse教育研究開発センター「放課後の生活時間調査報告書」（2009）

小学５年生から中学３年生までの１日の生活時間の変化を見ると、大きな変化がある時期は、小学６年生から中学１年生にかけてであることが分かった。睡眠時間は、学年が上がるにつれて減り、特に小学６年生から中学１年生にかけて42分減少している。中学生になると、多くの生徒が部活動を始めることで、放課後の過ごし方にも変化が見られ、小学６年生から中学１年生にかけて放課後の時間が40分減少している。部活動がある分、中学１年生が学校にいる時間の合計は小学６年生から１時間16分増えて８時間50分となり、１日の３分の１以上を学校で過ごしていることになる。

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回
「中学生にする」導入期指導の工夫

2 「時間をむだに使っている」と感じる中学生は6割を超える

Q あなた自身について次のことはどれくらいあてはまりますか。



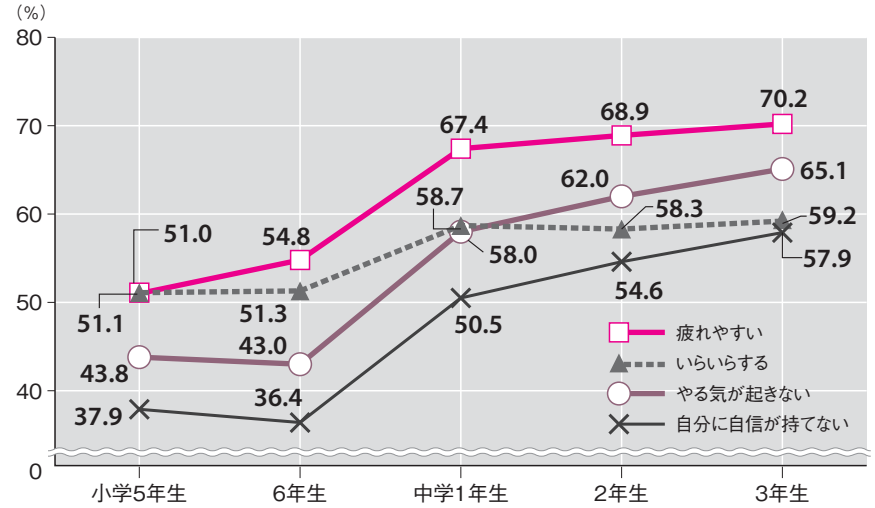
注1）数値は「とてもあてはまる」+「わりとあてはまる」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「放課後の生活時間調査報告書」(2009)

子どもは自分の毎日の過ごし方をどのように感じているのだろうか。

小学6年生と中学1年生の違いに着目すると、「もっとゆっくりすごしたい」と感じている子どもが69.5%から81.7%に増加しており、中学生になって毎日が忙しくなっている様子がうかがえる。一方、「時間をむだに使っていると感じる」という回答が46.9%から60.3%に増加している。自分の思うように生活を管理できていないことから時間の使い方に無駄を感じているのかもしれず、定期的に振り返りの機会を設けることが必要かもしれない。

3 小6から中1にかけて心身の状態が不安定になる傾向

Q あなたは次のように感じることはありますか。



注1）数値は「とても感じる」+「わりと感じる」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「放課後の生活時間調査報告書」(2009)

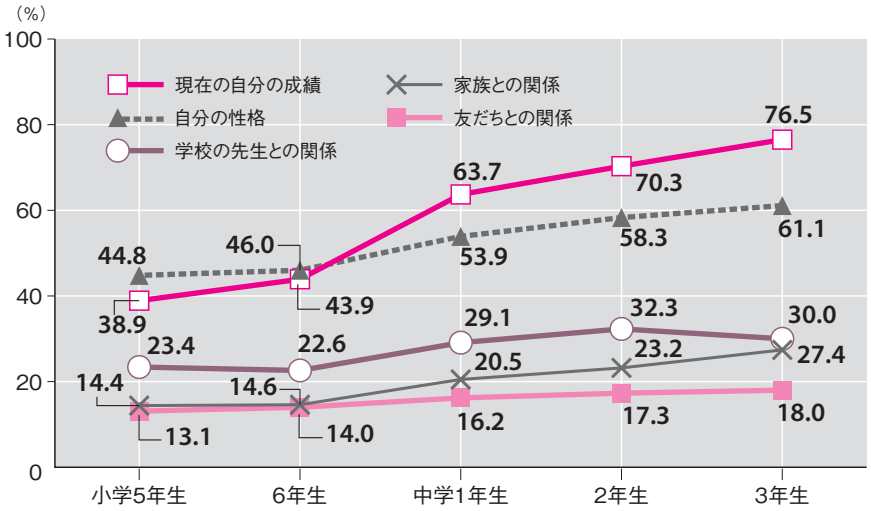
心の状態にも、特に小学6年生から中学1年生にかけて大きな変化が見られる。

「疲れやすい」(54.8→67.4%)、「いらいらする」(51.3→58.7%)、「やる気が起きない」(43.0→58.0%)、「自分に自信が持てない」(36.4 →50.5%)の4項目がいずれも増加している。中学生になって生活環境が変化したこと、発達段階として自我が芽生えてきたことなどが、生徒の心の状態に影響を与え、小学生時代に比べて、心が不安定になっているのかもしれない。

＊出典の調査データは、Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。 http://benesse.jp/berd/ ＞「調査・研究データ」

4 自分の成績に不満を感じる生徒は、中１で６割、中２で７割

Q 次のようなことについて、どの程度不満を感じていますか。



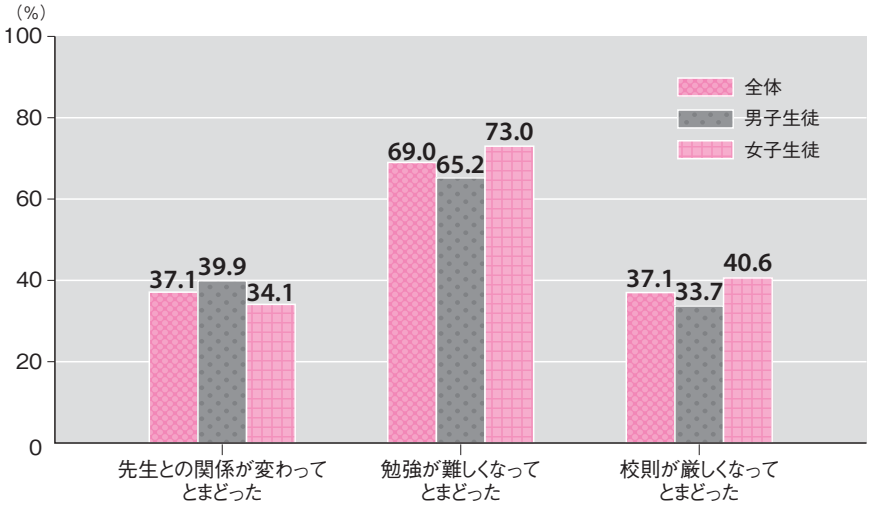
注１）数値は「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査報告書」(2010)

小学６年生から中学１年生にかけての満足度の変化をみると、「現在の自分の成績」について、不満足との回答(「あまり満足していない」「ぜんぜん満足していない」の合計）が43.9%から63.7%に増加している。小学校の時に比べて学習が難しくなり、普段からきちんと学習しないとテストの点数が伸びにくくなっていることがうかがえる。

また、「自分の性格」や「家族との関係」についても、小学６年生から中学１年生にかけて不満足と答えた割合が増加している。「学校の先生との関係」は、小学６年生から徐々に不満を感じる割合が増え、中学２年生でもっとも不満足度が高い。

5 入学時に「勉強が難しくなってとまどった」生徒は約７割

Q 中学校に入学したとき、あなたには次のことがどれくらいあてはまりましたか。
（対象：中学校２年生）



注１）数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「神奈川県の公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」(2011)

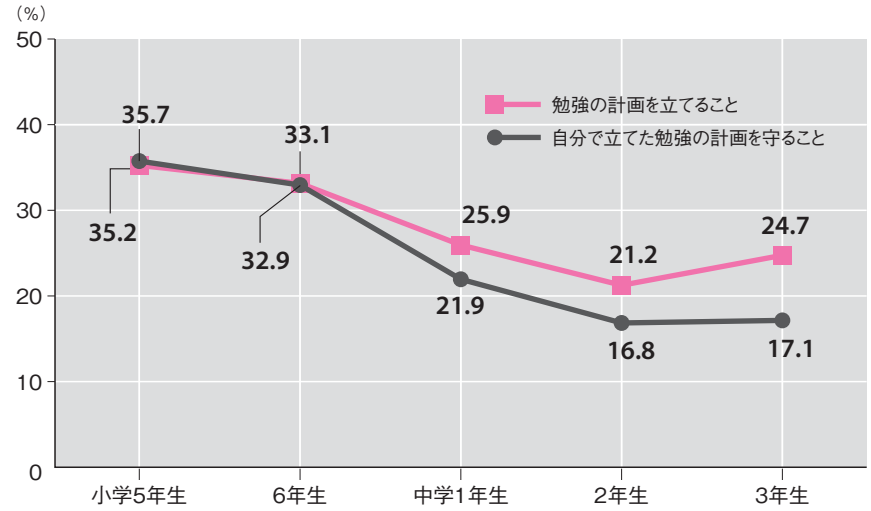
中学２年生に、中学校入学時を振り返って戸惑ったことを聞いたところ、最も多かったのは勉強の難しさであり、約７割が戸惑ったと回答した。先生との関係の変化、校則の厳しさへの戸惑いはそれぞれ約４割だった。

性別での違いを見ると、男子は女子に比べて先生との関係で戸惑いを強く感じ、女子は男子に比べ勉強や校則面でより戸惑いを感じやすい傾向が見られた。

「授業」で生徒を、学級を伸ばす
第4回
「中学生にする」導入期指導の工夫

6 自分で立てた学習計画を守ることが得意な生徒は、中1で2割

Q あなたは次のようなことが得意ですか。



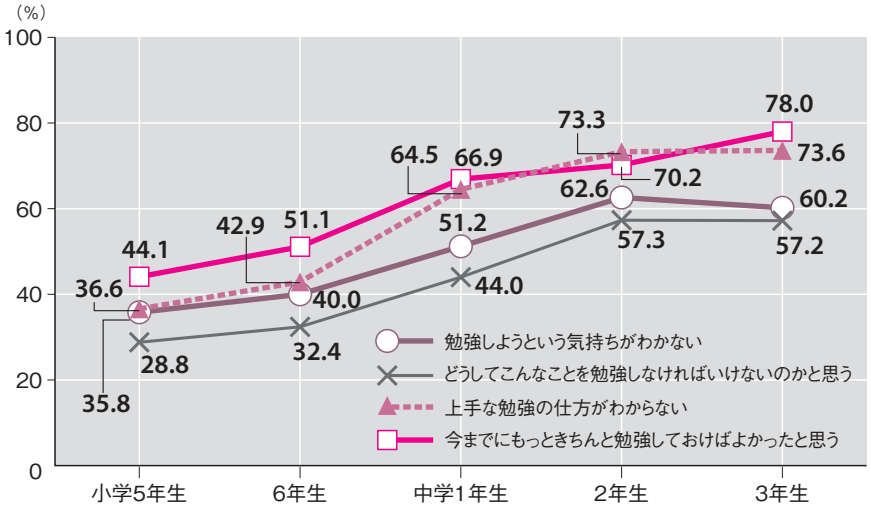
注1）数値は「とても得意」+「やや得意」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査報告書」(2010)

学習計画づくりとその実行について聞いたところ、「勉強の計画を立てること」を得意と回答した子どもの割合は小学5年生から徐々に減少し、中学2年生で最も低く21.2%である。「自分で立てた勉強の計画を守ること」も中学2年生での回答の割合が最も低くなり、16.8%と2割を下回る。

また、中学生になると、学習計画づくりに比べて、計画通りに勉強を進めることが苦手になる傾向が見られる。

7 「上手な勉強の仕方がわからない」は小6から中1にかけて2割増

Q 勉強の取り組み方について、次のようなことがあてはまりますか。



注1）数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査報告書」(2010)

勉強に対する意識や意欲について、「勉強しようという気持ちがわかない」「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」などの意識は、小学6年生から中学1年生にかけて増加し、約5割の子どもが勉強することの意義を見出しにくくなっている様子がうかがえる。

「上手な勉強の仕方がわからない」や「今までにもっときちんと勉強しておけばよかったと思う」という回答は更に高く、6割以上となっている。勉強の仕方を中学入学後に改めて確認することや「今からでも追いつける」という前向きな支援が更に必要とされているかもしれない。

＊出典の調査データは、Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。 http://benesse.jp/berd/ ＞「調査・研究データ」

特別企画
デジタル教材最前線
後編

10年先のデジタル社会を見据えて試行錯誤を繰り返す

後編では、携帯型ゲーム機と電子黒板を組み合わせて授業を行う取り組みを紹介する。更に、前後編で紹介した中学校の先生と、ゲームの教育分野での活用を研究する2人の研究者に集まっていただき、意見交換をした。

学校事例

東京都武蔵村山市立第三中学校
電子黒板とDSを併用し、学習意欲を向上

生徒の理解を促すツールとして電子黒板の導入を推進

武蔵村山市立第三中学校は、生徒の学力向上対策の一環として電子黒板などを使ったデジタル教材を授業に取り入れている。背景には、授業中の生徒の発言が少ないなど、学習面での課題があった。齋藤実校長は、デジタル教材を用いるねらいを次のように話す。

「授業で扱う内容を映像や音声で示せば、生徒は学習内容を鮮明にイメージできます。自然と『分かった』と感じる機会が増え、生徒が学習に興味を持つだろうと考えました」

2010年度、電子黒板の導入に当たっては、教師から「使い方を覚える時間がない」など消極的な声も聞かれた。そこで、練習用として電子黒板1台を職員室に置き、齋藤校長自身が職員会議などで使い方を説明し、他校で成果が見られた活用例を紹介するなど、理解を促した。

「私の専門である理科の授業を例に、『自分ならこう使う』と具体的に説明しました。先生方の心を動かすには、管理職が範を示す必要があると考えたからです」（齋藤校長）

やがて、授業の空き時間に職員室で練習する教師の姿が見られるようになった。その人数は日に日に増えていき、今では教師全員が何らかの形で授業に取り入れている。

予習と復習でDSを活用し生徒自身に成長を実感させる

11年度は、携帯型ゲーム機「ニンテンドーDS（以下、DS）」対応の学習ソフト「得点力学習DS」を3年生（3学級計81人）の英語の授業に取り入れている。授業の冒頭5分間を予習の時間とし、その日の授業で扱う

単語や熟語の意味、構文などを確認させている。導入当初からどの生徒もDSに楽しそうに取り組んでいたと、3学年担任の石田陽平先生は話す。

「DSの出題は一問一答形式ですからテンポよく進み、ゲーム感覚で気軽に取り組めるようです。不正解でもすぐに解説を読むことができ、発音を音声で確認できるため、学力下位層の生徒にも分かりやすいと思います」

10月からはDSによる予習と授業の連動性を高めた。まず、予習で身に付けた知識を確認したり活用したりする場面で、DSで出題された例文を電子黒板を使って示すようにした。更に、授業の最後に5分間の復習を設け、再びDSに取り組ませた。ソフトに搭載された「ニガテ抽出機能」を使い、各自のニガテを認識させると共に、その生徒が予習で間違えた問題だけを解くよう指導している。

「DSで出題された問題と似た問題を授業で扱うようになってから、わずか5分でも集中して予習をすると授業が理解しやすくなることを、生徒は身をもって感じているようです。また、授業の前後で理解がどれだけ深まったかを実感させるため、予習では出来なかった問題に絞って再挑戦させています。予習、授業、復習が一体となって生徒を学びに向かわせるサイクルをつくろうと考えたのです」（石田先生）

このように授業スタイルを変えたところ、生徒が授業に積極的に参加するようになったと、3学年担任の小野瀬佳図（よしひと）先生は話す。

「教師の発問に対してすぐに答えが出ない場合でも、『少し待ってください』と考え続け、粘り強く取り組むようになりました。それまであまり授業に積極的ではなかった生徒にも、発言が増えています。『予習で解いているから、自分にも分かる』と、生徒が自信を付けているからこその変化だと思います」

生徒へのアンケートでも、「予習にやる気が持てた」「予習で自分のニガテなところを意識することができた」などと感じる割合が、授業スタイルの変更前より増えている（図）。

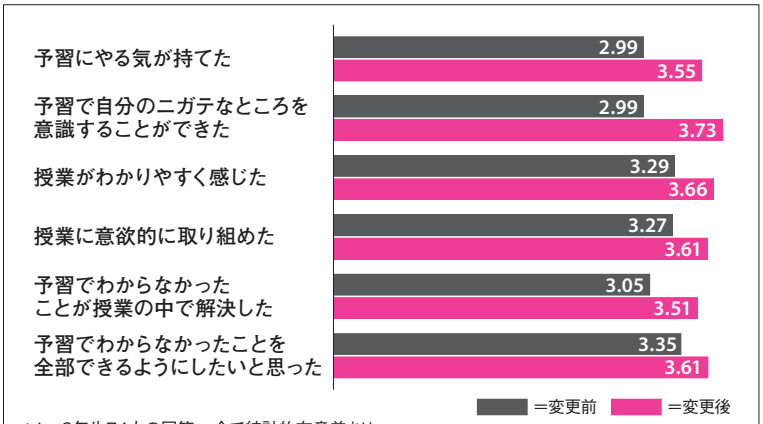
学習進路部の松橋翔先生は、教師としてもデジタル教材を使う良さがあると話す。

「DSや電子黒板を使うことによって、板書をする時とは比較にならないほど手軽に例文を示せます。板書のために生徒に背を向ける必要がなくなりますから、それだけ生徒の様子をじっくり見ることも出来るようになりました」

石田先生は、今後について次のように話す。

「DSで生徒の学習意欲は間違いなく高まりました。我々教師は、その意欲に応えるような指導をする必要があります。指導の幅を広げられる重要なツールとして、電子黒板とDS以外にも多様なデジタル教材をこれから授業に取り入れていきたいと考えています」

図　予習と授業の連動性の変更による生徒の感じ方の変化



＊1　3年生74人の回答。全て統計的有意差あり
＊2　各項目に対して、「とてもそう思う」を4ポイント、「まあそう思う」を3ポイント、「あまりそう思わない」を2ポイント、「全くそう思わない」を1ポイントとして、項目ごとに集計し、平均値を掲載

校長
齋藤　実

3学年担任、英語科担当
小野瀬佳図

3学年担任、英語科担当
石田陽平

学習進路部、英語科担当
松橋　翔

武蔵村山市立第三中学校
生徒数◎ 217人　**学級数◎** 8学級（うち特別支援学級1）
所在地◎〒208-0002　東京都武蔵村山市神明4-117-1
TEL ◎042-564-3001
URL◎ http://musashimurayama.ed.jp/mmced3c/

座談会

デジタル教材の活用のポイント、今後の課題
現場に負荷をかけず学習効果を高める教材開発に期待

テンポのよい授業で生徒の学習意欲が向上

前編は足立区立江南中学校、後編では武蔵村山市立第三中学校のDSを使った取り組みを紹介した。この2校の4人の先生と、「得点力学習DS」の監修を務めた立命館大のサイトウ・アキヒロ教授、デジタル教材を研究する東京大大学院の藤本徹特任助教を加えた6人で、デジタル教材の有用性や今後の課題について意見交換をした。

まず2校の取り組みを総括し、デジタル教材を活用した授業の良さとして次の3点が上げられた。

①授業がテンポよく進むため、生徒が活動的になり、授業に集中しやすい

②生徒同士の活動を取り入れる時間が生まれ、授業の密度が濃くなる

③デジタル教材で一度吸収した知識を使う場面が繰り返しあり、知識の定着が図れる

単にデジタル教材を使わせるのではなく、授業と連動させる工夫をし、生徒の意欲を伸ばしている点が、実践の成果といえる。

「英語が苦手な生徒でも、『さっきやった』と単語だけでもなんとか質問に答えようとする姿勢が見られるようになりました。英語に対する抵抗感が薄れてきただけでも、一歩前進だと捉えています」（小野瀬先生）

2校の取り組みでは、いずれも教師たちが試行錯誤し、効果的な操作法や提示の仕方を生み出したことに、藤本特任助教、サイトウ教授共に、高い関心を示した。また、4人の先生がいずれも20～30代と、ゲームに親しみながら育った世代であることに、サイトウ教授は注目する。

「小さい頃から使ってきたからこそ、教育効果の上がる機能や活用法を発想できるのではないかと思います。ソフトの開発に際し、若手の先生方の意見に耳を傾ける重要性を改めて感じました」

教師の創造性を生かせるようなデジタル教材の開発を

課題は、ゲームには深く考えなくても無意識に集中しているような受け身になりやすい特性があることだ。この課題に対し、アウトプットをする機能があればよいのではないかという意見が、中学校の先生方から出された。

「12年度に全面実施となる新学習指導要領では、英語にスピーチが盛り込まれます。スピーチに使う題材を入力しながら整理できる

■座談会参加者（写真左から）

東京都足立区立江南中学校……平澤 圭先生
立命館大映像学部……サイトウ・アキヒロ教授
東京大大学院情報学環……藤本 徹特任助教
東京都武蔵村山市立第三中学校…小野瀬佳図先生
同……石田陽平先生
同……松橋 翔先生

など、生徒のアウトプットを支援する機能があればよいと思います」（平澤圭先生）

また、ＤＳでの学習は個人で取り組むものであるが、授業の良さである集団での活動に発展できないかという意見も出された。

「例えば、ＤＳを電子黒板に接続し、生徒の答えを表示して発表をするなど、個の活動をクラス全体に広げられる可能性はあると思います」（藤本特任助教）

武蔵村山市立第三中学校では電子黒板が浸透しつつあるが、準備に時間が掛かるのが課題だと、松橋先生は話す。

「テンポよく授業を進めるためには次々と表示される電子黒板が欠かせないのですが、コンテンツをつくる時間を確保するのが大変です。市販のソフトはあるのですが、教室で使うには文字が小さいなど問題もあり、自分たちで用意しています」

現場では苦労もあるが、先生方はこれからもデジタル教材を取り入れたいと意欲的だ。

「デジタル教材はこれからどんどん発展する分野です。今から備えておかなければ、付いていけなくなるという危機感があります。5年、10年先を見据えて取り組んでいきたいと思います」（石田先生）

藤本特任助教も次のように話す。

「先生の指導の創造性を生かせるコンテンツが、デジタル教材浸透の鍵かもしれません。指導の負荷を減らしつつも、学習効果を高めるソフトの開発に期待したいと思います」

デジタル教材で学びに向かう意欲をサポートする

白鷗大学教育学部教授・学部長
NPO 法人教育テスト研究センター理事
赤堀侃司（かんじ）

これからのデジタル教材のあり方を考える際に、教える側と教わる側、つまり教師と生徒の情報伝達の現状を改めて振り返る必要があると思います。教える立場にある人は、教えたい内容を口にした途端に、その情報を生徒がきちんと受け止めていると思いがちです。メールを送りさえすれば、相手は読んでいるだろうと期待するのと同じことです。

そうした錯覚に陥らないために、授業の理解度を、教師も生徒も共有する重要な機会が「問題を解かせる」ことです。予習問題で既存知識をリフレクション（振り返り）しながら学ぶ。復習問題で分かったつもりが分かっていないことに気付く。定期考査前の勉強と答案返却後の見直しについても同様で、いずれもとても大切なことです。しかし、特に理解が十分でない生徒にとって、そうした問題に自ら向き合うことは、とてもつらく困難なことです。デジタル教材を使うことで少しだけ向き合いやすくして、心理的にも間違えることへのハードルを下げることが可能になるのです。

私の研究分野の１つに、メディアと教育のかかわりがあります。これまでの研究で、ＤＳは、パソコンなどと比べて、子どもが学習に向かうための心理的な垣根が低く、「つい勉強をしてみたくなる」特別な性質があることが分かりました。私は、その理由の１つに「小さくて簡単に操作できる手軽さ」が関係するとみています。

この手軽さから、学習者は隙間時間を有効に活用できます。わずかな時間を大切にすることは、時間を、ひいては人生を大切にすることにもつながります。しかも、同じ50分でも10分間×５回で集中した時間と、50分１コマとでは、異なる気付きやひらめきが得られると思います。

デジタル教材の発展はこれからです。学力を付ける手段の１つとして前向きに捉えて、関係者が一丸となって教材の完成度をより高めることが期待されています。

得点力学習 DS シリーズ

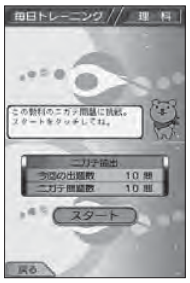
前後編の両校で授業に用いた「得点力学習 DS」シリーズは、新学習指導要領に対応した内容にリニューアルして、2012年3月に発売予定です。

監修は、立命館大映像学部の細井浩一教授、今回の座談会にも参加したサイトウ・アキヒロ教授です。従来からの「ニガテ抽出機能」に加え、計画のサポートや目標管理などのゲームの要素を取り入れ、学習意欲の継続に生かせるソフトとなっています。

◎ソフトの内容やご購入についてのお問い合わせ
http://ds.benesse.ne.jp
＊上記サイトでご購入いただけます
（店舗での販売はしていません）

新機能

学習スケジュール機能
学習範囲や日程に合わせ最適な学習スケジュールを設定



ニガテ抽出機能
間違えた問題だけを抽出して学習する機能

読者のページ

Reader's VIEW

2011Vol.3特集「学び合い―クラス全員が学びに参加する授業―」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト（http://benesse.jp/berd/）でご覧いただけます。

◎言語活動の充実がうたわれている新学習指導要領の全面実施に向け、各教科でどのように取り組んでいくべきか、その指針となる内容でした。特に国語以外の教科でも盛んに取り組まれている現状を知り、少しずつでも「学び合い」を取り入れていきたいと思いました。［福島県／M中学校／A・K］

◎上越教育大の西川純教授の「学び合いだから生徒が孤立したのではなく、孤立が顕在化したに過ぎません」という言葉が印象に残りました。課題整理では、学び合いに関するよくある疑問や不安が的確に示された上で、学び合いの構え、各校の実践が示されていて分かりやすかったです。［長野県／N中学校／K・Y］

◎上越教育大の西川教授の「教師が特定の生徒に介入してしまっては、生徒の『自ら他者とかかわる力』を伸ばせません」という言葉を読み、どんな力を付けたいのか、生徒に任せっぱなしではないか、力は確実に付いたのか、支援の必要な生徒はいないかなど、考えさせられることが多くありました。［岐阜県／I中学校／K・N］

◎成績に応じて、どうグループ分けをし学び合わせることが有効なのか、学び合いにより上位層を伸ばせるのかなど、疑問に思うことが多くあります。佐賀市立東与賀（ひがしよか）中学校では、学力下位層の生徒を伸ばすだけでなく、上位層の生徒の学習意欲にも応える研究をしていて、参考になりました。［東京都／D中学校／M・A］

◎「教師は生徒をつなぐ役目に徹し、自らかかわり学ぶ力を育む」という松川町立松川中学校の先生の言葉が印象に残りました。授業の展開例や教師の振り返りは参考になりました。［兵庫県／T中学校／S・K］

◎私には「学び合い＝グループ学習」という意識が強く、形から入ってうまくいかないことがよくありました。どうすれば生徒同士の学びを深められるのか。小牧市立北里中学校の事例にもあるように、生徒に自分の経験や気付きを発言させ、教師はそれらをつなぎ、生徒と共につくり上げることを第一に考えることが大切だと思いました。［富山県／F中学校／O・H］

◎学び合いの機能が「関心、意欲、態度」「知識、理解」「思考力、判断力、表現力」「技能表現」のどれに効果的に働くのかが見えませんでした。しかし、記事からは、少なくとも「関心、意欲、態度」に効果があることは分かりました。共通理解の手立てとして「通信」を発行することは、自校で学び合いを取り入れる際に役立つと感じました。［北海道／H中学校／K・S］

◎学び合いの推進には、校長の思いも大切ですが、今の学びを何とかしたいと考える仲間が必要であることを事例を通して感じました。特に、今までの授業を転換すべき人に参加を促し、意欲を引き出すのが鍵だと思いました。［神奈川県／O中学校／F・T］

お知らせ

文部科学省が被災地の学校と提供者を結ぶマッチングサイトを開設しています

「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」http://manabishien.mext.go.jp/

編集後記

取材からの帰り道、まだ袖の長い制服を着て、緊張と期待を抱えながら中学校の門をくぐった当時の自分を思い出しました。「新入生の課題や不安を受け止めつつ、期待や意欲を中学校3年間の成長につなげていく。導入期はそのスタートです」――先生方が導入期に取り組まれている指導の工夫は、目の前の新入生の課題だけでなく、その後3年間の生徒の成長を見通した上で位置付けられたものであることを教えていただきました。（佐藤）

VIEW21 中学版 2011 Vol.4　2012年2月13日発行／通巻第312号

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　（株）ビーヴィオコーポレーション
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　長谷川敦、二宮良太、山口慎治
撮影協力　荒川潤、石田理恵、川上一生

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
電話 03-5320-1287
〒163-0411東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2012